4 章　暴虐（ティラニィ）——人間論

中世以来，ヨーロッパ人にとって中東は，キリスト者がそこより瀆神の暴行によって追放された土地とみなされてきた。キリスト者の精神の母なる土地は，掠奪者，殺害者，迫害者の住処となり，暴力と殺人の宗教が支配する世界である，とされて来たことはすでに述べた。コンスタンティノープルに君臨する政府は，圧制と暴政で中東を支配していたことが認められていた。トルコの支配する土地は海賊や山賊が横行する土地と描写され，政府も収奪を企てているとされていた。検疫線では兵士も旅行者から収奪をねらっていた，と19世紀の旅行者は明らかにしていた。慣れ親しんだ文明の境界線を越えると，そこは，「放浪者」と「盗賊」の，無頼の徒の居住地であり，殺人を生業とする者達の居る荒涼たる世界である，と言表されている[1)]。病気を確認し，回避し，克服し，自然と気象の力をみつめ，その危険から身をかわし，旅人は，今，盗み，収奪，暴政，殺人の世界へ足をふみ入れる。19世紀のヨーロッパ人旅行者は，それをいかに書きとめたか，どのように解釈したのだろうか。

1. 欲望と暴行

i　盗賊

イェルサレムの城壁の東側，イェホシャファトの谷にあるゼカリアの墓の中庭で，市の南部シロアムのアラブ人が，付近の墓の計測を行って出て来たソルシィ一行に向かって，突然突進してきて「心付け（バクシーシュ）」を強要した。この「不愉快な奇襲」は，旅人が「みたところ武器を持たずに行動している」とみての無頼な行為と説明され，ソルシィはポケットからピストルを取り出し，「火薬と鉛を飲むつもりなら，お前にサーヴィスする」と言うと，そのアラブ人は退散した，と述べている[2)]。また，シナイ半島の北部，地中海岸で，エル・アリシュ（El Arish）に向かっていたとき，アービィとマングルスも，少人数のタバコ・キャラヴァンに出会い，「非常に粗野なやり方」で心付け（バクシーシュ）を要求される。もちろん，二人は拒否し，火器を示して彼らが盗賊となるのを阻むことに成功する。「機会があれば，これらの人々が盗みを働くことは疑い得なかった。事実，彼らの無礼な要求はそれを証していた」と旅行者は言明している[3)]。心付け（バクシーシュ）の強要は，中東が強迫者の住処であると認め得，そこに強盗の芽を認め得る，と旅人は確信しているようだ。ピストルを見せることは，彼らの邪な欲望を忘れさせるに充分な手段であることを旅人は言明する。

アラビア半島ネフド砂漠の南の縁で，掠奪を企てて急迫してきたシャンマール族（Shammar）の男三人にダウティは止められた。「悪魔のような眼差しを注ぐ」彼らは，旅人を「対等にわたりあえるものとみて」，旅人の御者が同族の者であったのでそれに仲間となるようさそう。御者が旅人の仲間なのだからそれは許されぬと言うと，三人の男は「歯をむき出しにし，残忍に苦笑」

しつつ，旅人の前から姿を消した，と説明されている[4)]。襲いかかる不審な者は，悪魔のように旅人には見え，友たる同行者は信頼するに足る誠実さを示している，と対比的に描写されている。しかし，御者は，まだ，旅人に責任を負うというより，自ら所有するか，管理すべき動物に対し責任を負っているにすぎないのかもしれない。旅人に対し，契約上責任を負っているのは，保護し，案内すべき，エスコートの族長（シェイク）と言わねばなるまい。それを当然のこととして，旅人は記述する。ポーターとソルシィは，それぞれの旅において，そのエスコートの族長の活躍ぶりに言及し，彼らに対する信頼を明らかにする。

ダマスカスから古代の隊商都市パルミラへと向かって旅するうち，ポーターは，四度不審な者達の接近を経験したと述べている。急迫する騎馬の男に掠奪の危険を感じ，道をさえぎるようにして進んで来る棍棒を持った男達に対して，その「性格と意図は疑いない」ものと言明し，彼らの攻撃にそなえて抵抗のかまえをとっている。そうした指示はエスコートの族長が旅人達に対し適確に与え，不審人物と応対していることが明らかにされている。多くの場合，旅人側の対応を見，その武器を見て，ときに一言も言葉を交わすことなく，不審な者達は去ってゆく。エスコートの族長と旅人の態度が，「望ましい効果を生む」ことになったと述べられている。荒涼な自然の中の，ベドウィン同士の会話や「パントマイム」が，旅人の目の前で，いささかの恐怖感をともないつつ展開されていることが，明らかにされている[5)]。

神の怒りの風景の地，死海付近では，ソルシィが不審な人々の集団の接近を経験している。銃や蛮刀を持った30人ほどの「掠奪せんとした盗賊達」に，エスコートの族長は決然と対応し，戦うなら死を覚悟せよと，「簡潔な物言い……恐るべき声」で盗賊達に迫る。それは「呪術的効果」を生むこととなり，掠奪を思いとどまる方が賢明であると考えた盗賊達は友好の意を表明し，ときに，旅人達を自らのキャンプに招待することとなった，と述べられている。ソルシィ一行を襲おうとした二つの集団の内の一つがアドラム族（Adullam）であることが分かると，旅人は，聖書にしるされたユダの部族の都市があった所であろうと解釈し，神の世界への接近を確信しているように思われる[6)]。アドラムという言葉でサウルに追われたダヴィデが避難したことが思い起こされたのであろう[7)]。

このように，エスコートの族長の態度や火器が，盗賊を退散させることから，ベドウィンの盗賊の置かれた一般的な状況が明らかにされることとなる。所属部族を掠奪目的で離れる「放浪者」が一般に盗賊として恐れられる。少人数でその族長から離れ顔をかくすようにしている彼らは，その所属部族が同定（アイデンティファイ）されることがないため，盗みや殺人の行為は賠償や報復を期待され得ず，逆に，盗賊の方が殺されても同族の者は彼らの所属を否定する故に，血讐は行われないと理解されている。従って，法の外に置かれた彼らを射殺しても罰をうけないため，襲われたものが火器を見せて抵抗を示した場合，その決心を盗賊は疑い得ず，「火器を見せるだけで，一般には，彼

らをおどすに充分であろう」[8]と明らかにされている。

こうした立場にある盗賊が襲撃を実行するとすれば，まずは，抵抗する人物が居ないか少数である場合であると考えられよう。

ベトレヘムからイェルサレムに向かっていたスティーヴンズ一行は，前日先に出発していた御者が，地面にすわりこみ，青ざめた表情をし，沈んだ姿をしているのに出会う。前日までの小ぎれいな衣服ではなく，古いショールをターバンとし，ボロのベドウィンの服をつけた御者は，前日4人のアラブ人に呼びとめられ，逃げようとした時に小銃で着衣を射ぬかれ，身ぐるみはがされて放り出されたことを旅人に告白した。

> このみじめな仲間は，その話からすると，勇敢に行動したというわけではなさそうであった。脇腹のかすり傷も，生命が危険にさらされたことも気にかけておらず，衣服を失ったことをひどく悲しんでいた[9]。

と，スティーヴンズはコメントしている。小パーティを守護するエスコートの勇敢さと対置される言表であり，暴虐の世界の中のその餌食になった者のみじめな姿が浮きあがるようになっている。

このような，中東のイメージとして表出されてきた暴虐の風景の中の，掠奪行為は，対象社会の状況，部族関係の中での出来事として，旅人によって読まれてゆくことになる。一連の旅行者襲撃事件からこの点を明らかにしてゆこう。

死海東岸のエル・メズラー村（El-Mezrâah と表記，現在は Mazra'）でテントを張っていると，村人達が絶え間なく忍び込んで来て手あたり次第盗んでいった。夜8時頃，突然のすごい音があちこちでし，エスコート——このソルシィの旅では，タアメラ族（Thaamerah, Ta'âmirah），ジャハリン族（Djahalin, Jehalin），ベニ・サカル族（Beni-Sakhar, Beny Sókhr, Beni Szakher）がエスコートしていた——の一人が目を血走らせてテントの中に走りこんで来て「銃を取れ」と叫んだ。テントを出たソルシィの目の前に，「雷鳴をも圧倒せんばかり」の騒動があった。

> 世にも美しい月光の下，土埃の雲の中で人々は叫び，犬達は人間より大きな音で吠え，女達は恐ろしく号叫し……犬よりも大きな声を発していた。

「不断の窃盗」をしていた村人が，「手取り早い行動と，全員の虐殺を決意」し，ソルシィ一行を襲撃してきたことは明らかだった。迫りくる危険が，ロマンティックな光景の中の出来事として描写される。武器を取って，激しく興奮するエスコートのアラブ人達，土埃の中を「デーモン

のように振舞う騎馬の男」，乗馬するソルシィの友人達の姿が明らかにされる。そうした騒ぎの中，ソルシィは仲間に「慎重に，沈着であるように忠告し」，自分が撃つまで発砲を禁じ，事態の推移を見守った，と自分の姿を明らかにしている。そして，突然，騒ぎが止む。すべてが終わったと説明され，他の部族の者が来てエスコート権を主張し，ソルシィのエスコートが武器で応待したことで騒ぎがおこったと説明される。しかし，それは，この説明を行ったジャハリンの族長の作り話であって，村人が掠奪を企て旅人を襲撃したものの抵抗がはげしく，あえて掠奪に固執すると，この地域で力をもつエスコートのベニ・サカル族すべてを敵にまわすこととなり，「悲惨な村が絶滅するに至ることを知」って，最も勇敢な者が殺されると残りの者は掠奪を放棄して逃げ出し，騒ぎがおさまった，というのが真相であったと旅人は明らかにしている。逃げ去った村人は，「無実と無関心をよそおい」日常にもどり，エスコートは「自らの忠実さを証明する好機に大いに喜ぶ」，と対比的に描写されている[10)]。出来事の全貌と，死海周辺の部族関係は，いささかあいまいなまま語られ，襲撃状況での人々の姿の明確な対比的な描写と対照をなしている。旅行記の記述の中にあって，旅人襲撃事件の登場人物は，あたえられた役割を，ロマンティックな光景の中で，上手に演じているようにすらみられよう。

シナイを旅していたブルクハルトは，ガイド役のトワラ族（Towara, Towarah, Táwarah）の男三人とともに，アカバ付近に進んだ後，シナイのトワラ族に友好的な地域に戻った時，ガイドの一人が「銃をとれ，敵だ」と叫び声をあげた。ラクダをひいていた男はその声で，背に銃を置いてあったラクダを，フル・スピードで谷を追いあげてしまった。なんとかブルクハルトがそれにおいつき銃をとったとき，２発の銃声がし，信頼に足る男，ハムドが敵の手からのがれて来るのが目にとまる。

> 彼の目は興奮で血走り，シャツには血がとび，片手に銃を，片手に血ぬられたナイフを持っていた。足からは血が流れ，ターバンを失っていて，長い黒髪は肩までたれていた。

最初に叫んだ男がハムドにつづき，その後方には，アラブ人が一人地面に倒れ，他の三人がその男の所にかがみ込んでいた。危機を脱した所で，旅人はハムドの説明をうける。ハムドが敵との叫び声で火縄に点火した時，襲って来た男が発砲し，ハムドもそれに応えて発砲し，その男めがけてナイフを持って突進し，相手をたおしたと言う。

抵抗を示した旅人に対し，ベドウィンの盗賊は敢えて無理をしない，という通常の行為と異なって，旅人一行を殺そうとしたことに対して，ブルクハルトは，襲撃側の人数が抵抗なしに金品を掠奪するには少なく，掠奪した所でガイドの属するトワラ族は近隣諸部族と友好関係にあって，一人でも逃げられた場合，自分達が同定（アイデンティファイ）され，掠奪物の返還，血や傷に対する罰金の支払い

がさけられなくなる故，旅人一行全員の殺害を企てたことは疑い得ないと言明している[11)]。虐殺意図のうらにベドウィンの習慣のあることが明らかにされ，それが襲撃時の暴虐さへの歯どめになることも，また，逆に促しとなることも，同時に説明されることが明らかになっている。すべては，出来事の情景の描写の中にとけこみ，その状況の中で解読している旅人の姿が浮彫りにされてくる。盗賊の居る荒廃の風景の中の情景は，冷静さ，沈着さをそなえた者と表出された旅人自身の手によって，説明の正しさについてはともあれ，まずは充分に表象されるという構図が明らかとなる。

ii　エスコートの強欲さ

盗賊に対しては旅人に誠実さを示す者と描写されたエスコートも，自らの立場においては，旅人に対しその強欲さをむき出しにする存在であることが旅人によって明らかにされている。

ダマスカスから南下し，死海の東から南へとまわってカイロへ向っていたブルクハルトは，エル・ゴールの東の町々でガイドを見つけるのに苦労していた[12)]。ケレク（ケラク）で，ダマスカスの友人がしたためてくれた推薦状を手渡すため，町のシェイクに儀礼的訪問を行った彼は，それが適宜なことではなかったと後悔せざるを得なかった。町のシェイクは彼の南下の意図を聞いて，自分が南の地方を訪問するのに同道するよう命じ，秘書を通じてその案内に対して何かプレゼントを行い，かつ，ガイド料を支払うよう求めた。プレゼントは拒否したブルクハルトだったが，シェイクの命令なしには誰も彼のガイドにならぬことが分かって，50ピアストルのガイド料支払いに同意し，シェイクに同道した。途中，シェイクの妻の居る村で，さらに20ピアストルの支払が求められ，そこより南下は，それが同意されぬと許されないことに「少なからずおどろいた」ブルクハルトは，次のように考え，なんとか値切る交渉を行っている。

> もし，彼の要求を甘受しなければ，彼はいくつかの方策を講じて，それを逃れるためには倍の額の支払いを行わねばならないような状況に追こむのは明らかであった…。

所持金をほとんどまきあげたとみて，シェイクは，次には旅人の所持品に目をつけ，自分のものと高価な旅人のものとを交換しようと申し出る。

> ベドウィンの要求には限りが無い。彼らには慎ましさがないし，それに当たる言葉を持たない。もし人が拒否をし続けた場合，彼らは決して力づくで取ることはない。しかし，彼らの絶え間ない嘆願や愛想に屈せずに拒否を続けるのは非常にむつかしい。

こうして，最初に拒否されたプレゼントに代わるものを，道中でシェイクは旅人からまきあげることに成功してゆく[13)]。ワディ・アラバの東方の村で，シェイクは，普通の倍の料金でガイドを手配し，その中から5分の1ほどを手数料として収めている[14)]。ブルクハルトがこのシェイクに会ったことを後悔したのは十分に理解されよう。聖書の時代にイスラエル人を苦しめたモアブの土地は，ここでは，強欲なガイドの土地として旅人の目の前にあらわれている。しかし，アービイとマングルス，それに，同道するレイとバンクスは，モアブへの入口でエスコートの「奸計」に苦しめられ，モアブ進入を断念させられている。

スーフ（Souf と記述，今は Suf）―ジェラシュ（ゲラサ）間を遺跡調査のために往復していたアービイ一行は，ベニ・サカル族の若きプリンス，イブン・ファイス（Ebyn Fayes と表記）とケラク行のエスコート契約を行う。この時，バンクスは全額（1,000ピアストル）を先払いしてしまう。付近のサルハーン族（Salhaan）の掠奪をうまくさけつつ進行するが，エスコートは近くの町，サルト（Szalt と表記，今は Salt）へ行くのをしぶり，自分達の部族のキャンプへ一行を案内しようとする。追加の支払いを町へ行く場合には要求し，また，おどしこわがらせる，という方策を使ったもののエスコート達はキャンプ行を同意させることに失敗し，結局旅行者一行の御者達が60ピアストルの支払いを受けるという形でサルトの町まで案内することになった。エスコートはこの町と敵対関係にあったことが，ここで明らかとなる。町近くでエスコートは一行と離れた。エスコートの代理人は，この町でもキャンプへ同道するよう誘い，同意のない限り一行の出発は不可能であるとおどして来た。これ以上エスコートに身をゆだねるのは「無分別なこと」と考え，旅行者一行は，モアブの地を南下する計画を放棄し，サルトの住人に案内させイェルサレムへ向かうことにした。「旅人を自分達の支配下に完全に入」れ，自分達のキャンプで収奪の限りをつくそうと「一連の瞞着や虚言」を行ったエスコートのせいで，旅が妨害されたと言明されている。そのすべては，旅行者が先払をしたためだと認められている[15)]。信用し得ぬ者に対する不注意な信頼が，この荒廃の風景の中では，収奪と妨害行為を導き出していることを旅人は言明する。旅行者の力のもとに居かれ得たエスコートの誠実さは，その力の外に居かれたエスコートの奸計と対比されて旅行記に表出されていることが理解できよう。旅人を完全な支配下におくべく企画されたキャンプ招待，という旅人の読みとりは，ベドウィンのキャンプが盗賊の魔窟とみられ得ると解釈している旅行者の立場を明解なものとするであろう。この立場を，同様にキャンプ地への招待を受けたミディアンの地を旅するバートンは，「すべてが陰謀」である「ライオンの穴」に入ったと感じとったと語っている[16)]。

古きナバテア王国の都ペトラへの道を，アカバのシェイクの案内でスティーヴンズは進み，その途上でシェイクの奸計を知ることとなる。最初の，そして，その後くり返されたものは，「自分の価値」を高めようとしての誇張した「ホラ話」であった。道中の危険，アラブ人の性格の悪

さ，最初の出会で感じた友情，生命を賭しても危険から旅人を守る決意が語られる。あまりに度重なるこうした話のくり返しと，この地を以前に訪れたラボルドとリナンの気前の良さ――それは黄金のシャワーであったとか――を指摘することで「自らを暴露」，スティーヴンズはエスコートに対し「不信と軽蔑」の念をいだくと述べている。

夜，テントの中で眠りにつこうとして，アラブ人の声を旅人は耳にし，テントの入口近くの焚火の「炎を通して，二人の，野蛮な，獰猛な顔つきをし，炎に照らされた暗い顔色の，するどい目をぎらぎらさせたアラブ人」を目にする。彼らはエスコートに近づき剣を交えたところ，この場から離れていたシェイクが間に入る。旅人はこの情景を次のように描写している。

> その緋色の外套は肩から落ち，その暗い顔は赤らみ，その黒い目は炎を反映して輝き，その声は武器を打ち合わせる音を圧倒するという様で，シェイクは（斬り結ぶ）二人の間に割って入り，その長槍で彼らの刀を打ちあげ，アラビア語の喉音を出しつづける叫び声で彼らの武器をおろさせ，明らかに彼らを恥いらせ静かにさせた。

騒ぎの成り行きをテントの中から見守る旅人にとって，出来事はロマンティックな情景を成しているとみられよう。

この事件についてのシェイクの説明は，襲って来た者が心付け（バクシーシュ）を要求，それを拒否すると争いとなり，彼自身は旅人をどんな危険からも守ると強調し，数ドルを渡してなだめたというものであったが，旅人はこれを疑わしいものとする。更にシェイクはラクダの賃貸料の支払いを求め，また，ペトラ入口での住人に対する心付け（バクシーシュ）の支払いの必要を強調するが，旅人は支払いを拒否し，重ねての要求にはカイロに戻ることになると言明する。そして，ペトラを訪問した後，シェイクは旅人の目の前で旅人の召使いを買収しようとし，旅人の怒りをかうこととなる。シェイクは召使いに対し，自分への支払いの期待を語り，旅人の所持金を聞き出そうとして小銭を握らせた，というものであった。旅人は，この時の自分自身を，次のように描写してみせている。

> 私の召使の誠実さをけがそうとしたことで，彼のいやしさや極悪さを見い出した。……彼の背信の証拠が目の前にあった。私は大声で彼をテントに呼び戻し，…彼が不実で約束を守らず，以前は信用できなかったが，今は軽蔑すると語り，ヘブロンに着くまで一銭も渡さぬ…とした。……もし私を殺しても，そうせずに得られるもの以上のものは得られぬと述べ，ベルトのピストルに手をかけ，私がそれを守る以上，彼らは手に入れられぬと述べた。

このいささか芝居がかった言葉が通訳を通じて伝えられると，良い効果を生み，旅人を「有利な立場」に置くこととなったと説明され，かつおどおどとしたシェイクの姿が描かれるに至る[17]。旅人側の誠実さはエスコートの不実と対比され，旅人の決然とした態度はエスコートのおどおどとした態度と対比されて，エドムの，神の怒りの風景の中に，描き出される，といった構図をみてとることができる。偽りの世界としての中東のイメージは，荒廃の中の偽りにみちたアラブ人エスコートの姿として浮き彫りにされていることがわかる。

古代都市ペトラ付近は，ユダヤ系農民（フェラヒン）のリヤテネ族（Liyátheneh）の土地で，彼らは『エレミヤ書』に言うレカブ人と同定され[18]，アラブ人の生活様式をまねていると言及されている。パーマー一行は，この土地に居る間，彼らをエスコートとした。この「考えられる限り最も無頼なギャング」の窃盗になやまされ，また，この地訪問のための貢物（ブラック・メイル）として法外な額が要求されたが，騒ぎをきらった旅人側は受け入れている。しかし，廃墟見物は彼らの絶え間ない物乞いによって台なしにされ，その「取るに足らぬ厄介さは，ほとんど耐えられぬほどであった」と述べられている[19]。

ペトラを離れるに際し，モアブのシハン（Shíhán, Schihan）まで，20ナポレオン（400フラン）で，アマリン族（'Ammarín）の族長（シェイク）セラメのエスコートをうけることにした。ペトラを離れた所でリヤテネの男達が心付け（バクシーシュ）を求めてきたが，エスコートのベドウィンが集まって来たことからこれを旅人が拒否したところ，二人の「悪漢」が残り，その内の一人は以前旅行者のパーティに発砲し通訳に重傷を負わせていた「無頼漢」で，発砲するとおどして来た。エスコートにすすめられ，旅人は何がしかの金を渡して立ち去らせた。その夕方，ヘブロンよりエスコートをしてきたジャハリン族の族長ハムゼを通して，30ポンドの貢物（ブラック・メイル）をセラメが要求して来た。支払いがなければ，「ここに置き去りにして，リヤテネ族の盗みや殺害にゆだね，餓死するにまかせる」ということであった。結局11ナポレオンに値切らせた，とパーマーは述べている。このあと，つづけてエスコートから要求があり，そのたびに支払わねばならなくなる。すべてはエスコートのハムゼの無能のせいであって，ベドウィンにおどされるまま支払いを約束して来たためであることが旅人によって明らかにされている[20]。有力なエスコートのストライキや殺害のおどしに，無力なエスコートが従い，そのためにずるずると旅人の金が支払われてゆく，という図式が明らかにされる。旅人に従って来た者が無力で頼りにならないと，旅人も無力さをさらけ出すことが示されている。誠実さを示し味方であり，仲間であると期待されているエスコートが頼りにならぬとき，旅人は決然とした態度をとれなくなっている。荒廃の風景の中で，暴力がその真の姿をあらわす，ということなのであろう。こうした場合，金のみがその暴力を妨げる手段となっている，という構図をこうした旅人の言葉が明らかにしている。つまり，「（砂漠の）野蛮人は，常に，その金への欲望において，文明人にはるかに勝っている」[21]ということが強調される。この欲望に

まけて，エスコートは不誠実になり，旅人に敵対する者となり，荒涼たる風景の一部と化すものと旅人は明らかにする。

iii 暴　行

ナポレオン以降の中東では，その為政者の近代化政策にともなって，都市に西欧人の姿が目立つようになった。旅行者のヨーロッパの服装も，そうした変化を告げていたが，住人達の不満は，そうした服装の存在にそのはけ口を見いだしていたことが語られる。

カイロをロバで見物していたベルツォーニは馬に乗った兵士と出会うが，いきなりその兵士は鐙で旅人の右足を打ちつけた。シャベルのようなトルコ人の鐙のかどで，2インチ幅で肉片がそぎ落とされ，出血多量で近くの修道院へと運ばれ，30日の重傷であった。この時，その兵士は，旅人にむかって「2，3呪いの言葉を吐いて，何事も起こらなかったかのように去っていった」と描写されている。この兵士の突然の暴行について，兵士達がアリー・パシャによってヨーロッパ流の軍事訓練を学ばされていて，それに大変な不満をいだいていたので，旅人のヨーロッパの服装に対し報復を行ったのであろう，と旅人は説明している[22]。また別の日には，荷運びのラクダに追いつかれ，狭い通りで困っていた所，部下をつれた下級将校（ビンバシ）と出会ってしまう。旅人は道をあけるために後退することも，向きを変えることもできず，下級将校の障碍物となってしまう。この将校はいきなり旅人の腹をなぐりつけ，旅人は「そうした挨拶を耐え忍ぶのに慣れていなかったために」彼の肩にムチをみまってしまう。怒った将校はピストルをとり出し，旅人の頭をねらって発砲した。弾丸は旅人の耳のところの髪を焦がし，後ろに居た彼の部下に命中，即死させた。次のピストルを取り出した時，彼の部下が襲いかかって武器を取りあげ，近くの後宮護衛兵（セラリオ）によって下級将校は捕らえられ，旅人は事なきを得ている。ベルツォーニは，「その後，この種の機会を，ヨーロッパ人を虫を殺すように冷淡に殺害できるような男に，与えることのないよう，十分に注意を払った」と述べている[23]。目立つヨーロッパの服装は，現地住人の突然の暴行の的となっていたことは，ウィルソンがイェルサレムでの投石事件に関連して，そこの修道士からヨーロッパの服をオリエントの服に変えるよう忠告をうけていたことでも明らかである。

> いかにキリスト教徒が，東方の服を身につけ，変装していようと，モスレムにはすぐ分かってしまう。しかしながら，彼らは，（旅人達が）自分達の服をまねるのは敬意を払うことだとみているようだ。このことが常に，キリスト教徒にある程度の保護を与えている[24]。

このように述べているウィルソンも，パレスティナのナブルース（Nablous, Nablouse, Nâbulus,

Nablus と表記）では，「東方の服装にもかかわらず」，つばを吐かれ，嘲笑されるという侮辱を受けている[25]。もちろん，ここには，キリスト教徒とイスラーム教徒の長い敵対の歴史が関与する。中東の地は，旅人に対し「神の敵」と名ざし[26]，「砂の上に十字を書いて，悪意をこめて汚」す人々の土地であり[27]，「我々のノドを断ち切る好機を求めているだけの，狂信的なモスレムの土地」[28]であることがみつめられ，「発見」され，言明されている。旅人は，住人達によって，銃でおどされ，投石され，棍棒でなぐられ，絶望的な状況にまでおいつめられる。ときには，キリスト教徒である住人によって救われる。襲って来た者はおさえつけられ，あるいは，夜陰にまぎれての脱出が企てられて，旅人は救われることになる[29]。

初めのうちは旅人を客として受け入れたモスレムの町でも滞在がながくなると雰囲気が変わることになると説明される。

> 軽業師が町にやって来ると，人々は新奇さで満たされるが，彼らのすべてを存分に見てしまうと人々はすぐにあきてしまう。こうしたわずかな平穏な日々が終わり，私は人々の顔つきが好意的でなくなってきたことに気づいた。自分達の間を神の使徒の救済の宗教を拒否している者が歩いているのを見て，狂信的な心がふくれあがってきた。

こうして，一連の侮辱が旅人に対して行われることとなる。町の子供達の投石や嘲笑の裏に，年配者の狂信を旅人は認めることとなる[30]。旅人は，住人の好意の中にも必ずしも安心はできず，緊張の連続の中にあったことを確言することとなる。

アラビアを彷徨していたダウティは，メディナ北東の町ケイバール（Kheybar，現在は Khaybar と表記）に到着する。すぐと，ここのクルド人司令官（アガ），アブドラ・エス・シルアン――母はエチオピアのガラ族出身の奴隷女――に召喚され，所持品検査が行われた。尋問に対してダウティは，自分がイギリス人でキリスト教徒であること，アラビアの支配者の一人，イブン・ラシードの通行証を得ていると答えている。所持品の内，本や書類はメディナの大守（パシャ）の指示をあおぐべく送られ，他には「空気を計るもの」，あるいは，「空を計るもの」（air-measure, sky-measure）が恐れられた。すべては所持していた金――６リラ――とともに押収され，パシャの指示があるまで，旅人は司令官の監視下におかれることとなった。拘束は２ヶ月におよび，「捕虜」の生活を，「多くの重苦しい日々」を，「不当な拘禁」を経験されられたと述べられる。司令官のアブドラは，宗教的には狂った幻想の中にあって，「その掠奪者の心」は「血に飢えた狂信」と，ジッダやダマスカスで示された西欧の圧倒的な力との間で「宙づりにされていた」，と指摘されている。信仰の敵に対し，投獄や発砲でおどしてくる人々の中で，ダウティは，「旅人を客」とする友人達を得ていた。

ある日，アネロイド計を使っていたダウティは，使い古した紙を地面に置き，風で飛ばされぬよう石をのせておいた。このことを見とがめた住人は旅人に向けて発砲し，事件を耳にしたアブドラはこのことで呪術師の影を旅人に認めるに至る。モスレムの信仰では，紙を埋めることは土地に魔法をかけることを意味していた，とダウティは記述する。このような危険の中で，ダウティはパシャに直訴し，パシャの好意を得るのに成功する。勅令が出て，旅人は拘束を解かれ，旅をつづけられたとされている[31)]。迷信の恐怖の中の黒人司令官に対し，ヨーロッパ人旅行者に理解を示す，開けたメディナのパシャが対比的に描かれているのがみてとれる。ヌビアやシナイのベドウィンは，呪術師が雨を移すと信じていて，その地を書きしるしたり，コンパスなどの道具を使うと呪術師とされる，ということをブルクハルトも指摘している[32)]。宗教的な対立という枠組みの中に，旅人は迷信や無知を相手側にみてとる[33)]，という認識の形を加えていることが明らかとなる。啓蒙され，世界状勢をながめているメディナのパシャに対して，暴行のモスレムは，迷信という枠組みの中で把握されている。従って，ノートをとることには十分な注意が必要で，いかにノート取りという行為をかくすか，どのように筆記具などをかくすか，ということが指摘されることになる[34)]。キリスト者であることを隠す旅人にとっては，このことは変装という問題につらなる。

こうして，信仰の敵であるモスレムに，旅人は，頑冥，無知な迷信にとらわれた姿を与え，「野蛮人」のレッテルを貼ることになり[35)]，自分には，ときに，沈着冷静に振舞い，ときに，決然と「非行に対して仕返しをすることは，自己防衛に必須の，道徳的義務」[36)]であるとして行動する姿を与える，という旅行記の言説が明らかになる。

2. 中 東 の 政 情

i　虐殺者

ナイルを第二瀑布へと航行していたウォーバートンは，ある日，美しい島を通りがかりに垣間見る。シュロの林の陰に平和な家々が見られ，畑は豊かに茂り，岸辺は金色の果実や花で飾られ，「すべての光景は，平和とおだやかな繁栄」を示していて，「パラダイスの印象」を与えていた。まだ幼くて手をやっとにぎれるほどの子供達，均整のとれた肢体をした上品な少女，彼女にもたれかかるようにしている豊かなヒゲと族長のローブをまとった老人，仕事の手を休めにこやかにほほえむ人々が旅人の船を見送る。

この場所は，この時，詩人達が唱いあげた黄金時代のすべてを実現しているように思われ

た。

２週間後，上流より戻ってきた旅人は，島の荒廃の様に驚愕する。家々は焼かれ煙をたてていて廃墟となっていたし，シュロの木々は切り倒され，畑は踏みにじられて死体が散乱し，おだやかな住民に変わって獰猛な兵士がみじめな光景の中にあった。島の住人のわずかばかりの財産は持ち去られ，うらやましく思えた住人達はほとんどが殺され，子供達は奴隷に売られ，女達は「悪魔の兵士の餌食となった」と語られる。

> 解き放たれた地獄でも，この島が示した変化以上の恐ろしい変化をもたらすことは，ほとんどあるまい。

おだやかな豊饒の楽園は，地獄絵に変わっていた，と旅人は明らかにしている。

事件は，島の住人が近隣の者に殺され，殺された者の友人達が報復を要求することにはじまったと説明される。ヌビアの知事が通りかかり，両方の部族の長を呼びつけるが，殺した側の賄賂を受けとって，奴隷を殺人者にしたてあげたところ，島の住人は肯んじず，自らの復讐の権利を主張してこの知事の力を無視した。怒ったこのトルコ人知事は，上流の町から300人の兵士を得，夜のうちに島を攻撃したという。

> 我々が到着したのは，このオリエントの正義が行われた，翌朝のことであった。……
> 私の血は憤りで煮えたぎった[37]。

ここには，無実の住人を虐殺した支配者の「正義」の残忍さに憤る，自由と正義の旅人の姿があらわにされ，また，砂漠と荒廃の中の束の間のパラダイスが，オリエントの虐殺者によって無残に破壊されてゆく様を旅人は目のあたりにする，という構図が明らかとなる。

ウィルソンは，アクル（アッコン）で，「ひどく心痛ませる光景」に出会う。この町の住人の多くが，目や耳や鼻を失っていることに驚かされる。それは，古代の暴君ヘロデ王に比せられ，ジェザール（「屠殺者」）・パシャと名づけられた前のアクル支配者，アフメッドの仕業であった，と説明されている[38]。「この異常な，残忍な人物」はボスニア生まれで，コンスタンティノープルの奴隷商人に自分自身を売り，エジプトのアリー・ベイに買いとられ，マムルークの奴隷という身分となるが出世し，ドルーズ派の首長（エミール）・ユースフによってベイルートの司令官に任ぜられた。ベイルートに着任したジェザールはスルタン以外の力に従わぬとしたため，ユースフはロシア艦隊の助力を得てベイルートを攻撃し，降伏したジェザールは，アクル知事（パシャ）ダーヘルをたよってア

クルに赴き，その知事の死後，アクルとシドンの知事となった，という経歴が紹介されている[39]。

この暴君の「報復の，手のこんだ残虐行為」は，その侍医によって旅人に伝えられた。

ジェザールは，多くの住人の顔をつぶしたのみでなく，不興をかって退かされた妻達の多くを殺戮した。そうした不幸な女の一人は，運悪く妊娠していることが分かり，ジェザールの手で胸をさされただけでなく，その腹から子供までひき出されたと言う。しかも，彼は，この「犯行の張本人」——つまり，不義密通の妻——だけでなく，40人の役人をも残酷に殺していた。刑の執行者は少しでも躊躇すれば，同じ刑がその身に及んだとされている[40]。

このような残虐行為を語る侍医に対し，旅人はイギリスでこうしたことが行われれば反乱になると語り，侍医の驚きに対しては，「我々の幸福な国の自由さ」についての彼らの無知を指摘し，イギリスでの支配者の思い通りの残虐さの不在を明らかにする[41]。ここでも，暴虐のオリエントが，自由のイギリスに対置されて表出されていることが分かる。この「人の姿をした化けもの（モンスター）」が，1791年にフランス人商人達をアクルより追放し，99年のナポレオンの侵入の口実を与え，イギリス海軍の指揮官，シドニー・スミスに助けられたのは皮肉と言うべきであろうか[42]。

19世紀のヨーロッパ人にとって，中東の虐殺者として最も著名であったのは，ムハンマド・アリー・パシャであった。バルカン半島サロニカ東方のカヴァラに生まれ，幼くして孤児となり，町の長官（シュルバジ）に育てられ[43]，エジプトのパシャにまで成り上った，この人物はヨーロッパ人の旅人にとって注目の的であった。ウォーバートンは，彼をナポレオンに比し，その経歴の類似を強調している。

> 両者は，異国の地の冒険者であり，軍事力によって政権を獲得し，その昇進を阻むすべての偏見を大胆に踏みつけにし，自らを破滅させようと襲いかかる危機を支配権獲得の手段に変えていった[44]。

アリーの統治は，「地中海から瀑布までのエジプトを，旅行者にとって，ニュー・ヨークの通りのように安全なものにした」[45]と評価され，その地の平穏さは，次のように言明されていた。

> エジプト各地で，旅行者は，今では，多くの文明国におけるのと同様の安全さで進み得，また，調査を遂行し得よう……。……旅行者は，危険を覚えることはないし，キリスト教徒は侮辱されたり，ひどい扱いを受けることはない。……自由な，最も開かれた行政が確立していた[46]。

多くの旅行者は，この人物に謁見し，通行許可証や発掘許可証を得ていた。旅人にとって，旅で

の自由な行動は何ものにも代えがたいのだから，こうしたアリー評価は，事実上は暴行で裏切られたにもせよ，当然のことであったと思われる。

しかし，旅人はアリーの成り上がりの経歴を，「大胆さと残忍さ，陰謀と裏切り」の連続として言及する。ある者は，ギリシアの多島海の海賊のキャプテンから成り上がったとし，ある者は漁師の身分から成り上がったとし，いずれも，その卑しく貧しい生い立ちを強調している。その，ファラオやカリフの王座への途は，「波乱万丈の，ロマンティックな」ものであったとされている[47]。

カヴァラから対仏トルコ軍に参加し，アブキールの戦いで軍功をたて陸軍大佐に昇進したムハンマド・アリーは，トルコ軍のアルバニア連隊の反乱に加わり，その指揮官となりトルコ軍の将軍を破ってマムルークの長官（ベイ）達にその指揮権を認められるに至る。アリーはその指揮力によって，アルバニア兵をたきつけ給与未払金の支払を要求させ，また，他方，カイロ市民には，名目上の司令官となったマムルークの長官がその支払のために課した増税に反抗させる，という作戦をとって，マムルークの支配力を排除した。その後スルタンにとりいり，またカイロの長老達の支持をとりつけ総督（パシャ）の地位を手に入れた。翌年，1805年にはマムルークの有力者があいついで死に，恐れる敵はいなくなった，とウォーバートンは説明している[48]。こうして弱体化したマムルークを，アリーは，1811年に，カイロの城砦（シタデル）で虐殺する。そこで一人を除いて500人のマムルークとその従臣が殺されたと言われている[49]。

幾人もの旅行者が，この虐殺事件について言及している。旅人は，この城砦の現場に足をとめ，次のように事件を思い起こしている。

> 私にとって，これら罪にけがされた地区の中で最も興味深い場所は，最後のマムルークが，メヘメット・アリーの血ぬられた裏切りを逃れ出た場所であった[50]。

> 旅人は城砦から退出する際，不幸なマムルークがとじ込められ，獣のように殺され，唯一人が勇ましい馬で城砦の壁を跳びこえた，その場所を示されるとき，無差別の殺戮者の前を去ったと感じる[51]。

虐殺の場は唯一の脱出者の思い出の場となっている。逃れ出た者を通して残虐な行為の悲惨さが強調されている。

アリーのマムルーク虐殺は，スルタンからの，聖地メッカ・メディナと占拠したワッハーブ派に対する追討命令により，息子のトゥスーンを司令官として遠征軍を派遣するのに際して，作戦会議とトゥスーン叙任式を口実として行われた。祝賀の式の後パレードが行われ，マムルークの

一団が砦に入ると後方で落し門がおり，「一瞬のうちに，彼らには，その運命が明らかとなった」と語られている[52]。ウォーバートンは，この時の情景を次のように描く。

> 彼らは空しく突進したが，前も周囲も，ただ白い無情な壁と閉ざされた窓があるだけで，開かれた空間はと言えば，ただ青い空にむかっていただけであった。この青空も，塁壁から１千梃のマスケット銃から発射された弾丸の雨が，防御のない，呪われた一団に注がれ，彼らの葬送の煙の棺によってくもらされた。…彼らのある者は，熱心な祈りをして，その鎖甲をつけた胸前に腕をくみ，そのターバンをつけた頭をたれ，またある者は，刀をひらめかせ，烈しく呪いつつ，むなしくその卑怯な，無慈悲な敵を求めた。一人を除いてすべての騎馬の壮麗な一群は，すぐに，恐ろしい砲下の下に沈んで赤く血にそまってもがき苦しむ集団となった[53]。

事件の翌年カイロを訪れたブルクハルトは，犠牲者の数を約1,200人とし，６年後のアービィとマングルスは，2,000人としていて，アリーの残忍さを，数の上で誇張しているとみられよう。年がたつにつれ，多分カイロのヨーロッパ人の間で，虐殺されたマムルークの数がふやされた，ということなのであろう。しかし，24年後のスティーヴンズは，実数に近い400から500人のマムルークと言及しているのだが，それ以前の数字については何も述べていない[54]。

このように描写した虐殺事件に対して，旅人は，パシャの「残虐な罪」と糾弾し[55]，「彼の残忍さと裏切りは，忘れるべきでなく，また，許されるべきではない」と断罪する[56]。

> エジプトのかつての君主であったマムルークの根絶は，その虐殺された人数に関して言えば，その流された血が大地から彼に対して叫び声をあげている何千もの人々に比べては，何ものでもない。しかし，それが行われた仕方は，パシャに，裏切者で，人殺しの王の烙印を押した[57]。

何故なら，すでに弱体化し，「落ちぶれていて，パシャに対して何らの重要な影響力を持たなくなっていた」マムルークは，「身の安全を，極めて厳かに保証され」「友好的な訪問」であるとして，「疑うことはなかった」にもかかわらず虐殺されたからであることが，旅行者によって強調されている[58]。ここでも，残虐と野蛮の犠牲者は無力で無実な者とされている。虐殺者の包囲から脱出し得た者が，残虐からの解放という点で，自由人たる旅人に感動をもって想起されることで，中東の支配者の残忍な拘束力——それはハーレムのイメージとして，ヨーロッパ人に受けとめられていた——が強調されている。

しかし，このような感情も，つづけての同様な虐殺事件では，消えてしまうようだ。翌年，エジプト南部の平定に出発したアリーの息子イブラヒム・ベグによって，エスネ(Esneh, Esne, Isna と表記，現在は Isna）で，食糧不足で救済を求めることを余儀なくされたマムルークに対して，全く同じワナが使われた。400人以上のマムルークが200人の黒人奴隷とともに，身の安全を「極めて厳かに約束」され下山したところ，一夜のうちに全員が虐殺された。前年の事件を十分知っていたであろうマムルークの「愚鈍さとうぬぼれ」にあきれ，旅人は，中東の人々が毎日のように「こうしたワナにかかるにまかせているという愚かさを見ることは，驚くべきこと」と言明している[59]。残虐な支配者には，愚鈍な臣民が従っていること，それが暴虐の世界の根底にあることを，暴行事件の際と同様に旅人がみてとり言表しているのは明らかである。

ii　抗争・陰謀・裏切り

ムハンマド・アリーに，マムルーク虐殺の機会を与えた，アラビアのワッハーブ派に対する追討軍派遣と，その戦い，再占拠――とくにメッカ，メディナの再占拠――の経過は，旅行者達によって明らかにされている[60]。

アブドル・ワッハーブが創設したワッハーブ派は，旅行者によって，「コーランの真の教えにまぎれこんだ悪弊を改革」することを目的したセクトで，メッカへの巡礼を「偶像崇拝として」禁止し，「メッカと神の家を占拠」した[61]「厳しい狂言者達」であると説明されている。一方で，「この強大なセクトは，モハメダニズムにとって，イギリス教会にとってピューリタニムズが意味するものと非常に類似したものを持っている」と説明され[62]，その一方で，ワッハーブ派は「不信心な者」と言われ，それに対するトルコ側の追討軍――エジプトの遠征は，もちろん，トルコ政府の要請による――は，「十字軍」と表現されている[63]。「この正統派の軍隊は，幾度かの厳しいチェックを受けた」[64]ものの，イスラームの聖地は再びムハンマド・アリーの手でトルコ側にとりもどされ，「聖なる都市（は）……解放」された[65]，と言及されている。

しかし，旅行者は，この一連の出来事の中に，中東の為政者達の裏切りの行為をみつめている。まずは，この追討を要請したトルコの宮廷が問題にされている。「トルコ政府がこのセクトを根絶しにするよう命じたのは，メヘメット・アリの富を使い果させ，彼を破滅に導くのを企てのことであった。……トルコ政府は，総督の不在につけこんで，御前会議政治に特有の裏切りや卑劣さでもって，メヘメット・アリの後継者…を任命した」と言明されており，さらに，この後継者はすぐに断首され，その裏切りに「見あうもの」が与えられ，アリーはその「自己本来の権利」である総督の地位を安全にした，と述べられている[66]。「イスラームの守護者」[67]の行動の裏に，イスラーム世界全体の主導権をめぐる争いが開始されたことを，19世紀の初めの旅行者はみて

とっている。

アラビア聖地の争いにおいても，旅行者は，裏切りの数々をみつめる。メディナの守備隊は，もともと，オスマン・トルコ政府によって送られたものであったが，その都市での定着化がすすみ混血兵のみの集団となり，さらに，その司令官(ガ)もその中から互選されるようになっていた。ワッハーブ派のサウードがメディナを攻撃して来たとき，司令官の地位を占めていたのは，ハッサン・エル・カライであった。

> 彼は，最下層の人々の間に生まれ，その巧妙さと狡猾さ，決然とした大胆さでこの地位に成り上った。……数年にわたる激しい奮闘により，この町の完全な支配者で専制君主となった。……彼は最も極悪な不正行為の罪を犯していた。……彼の名を汚名でよごす暴虐さと残忍な行為の数々が記録されている。

この圧制の暴君は，周囲のベドウィン達や町々がワッハーブ派に降伏すると，サウードにその地位を約束させてメディナを明けわたし，ワッハーブ派の支配下に知事としてとどまり，「新しい宗教に熱中したふりをして，ワッハーブ派の信仰の教えをその最も微細な厳密さでこの町の住人に強い，圧迫を加えた」と言う。そしてエジプト軍が再占拠を企てメディナに近づくや，トゥスーンと「秘密の協定」を結び，その地位を安全にされることをひきかえにエジプト側につき，都市を明けわたした。

> しかし，エジプト軍がこれらの場所を完全に制圧すると，身の安全を保証されていた司令官の…ハッサン・エル・カライは捕えられ，鎖につながれ，カイロ経由でコンスタンティノープルへ送られ，そこで運命を経験した……[68]。

この旅人の表現では，保身をはかった圧制の為政者の受けるべき運命の方が，エジプト側の裏切りより強調されているとみられよう。というのは，この出来事の直後メッカ，メディナに入った，同じ旅人ブルクハルトは，もう一人の支配者，メッカの教首(シェリーフ)・ガレーブに関して少し違った表現をしているからである。

メッカの教首(シェリーフ)は常備軍として500人ほどの兵士を持っていたが，ワッハーブ派の侵攻に対し周辺のベドウィンの力を得て戦った。しかし，その主力の南部ベドウィンの降伏で，常備軍だけとなった教首(シェリーフ)はサウードに降伏し，都市を明けわたし，「ワッハーブ派の信仰に回宗し，ワッハーブ派の首長の臣下になると公言した」と言われている。そして，アリーの遠征に対し「秘密の交信」を行なって「トルコ人の友」としてエジプト軍をむかえたガレーブは，アリー・パシャによっ

て捕えられトルコに送られた[69]。この出来事は次のように説明されている。

> トルコ（＝エジプト）軍は教首（シェリーフ）の助力なしにはアラビア進駐はなし得なかったのにもかかわらず，教首（シェリーフ）がパシャに味方すると言明し，ジッダとメッカにトルコ軍が駐留するのを許した後，彼を捕えトルコに送ったことで，アラブ人はトルコ人を裏切りで告発する……。……今は不承不承征服者に屈しているが，トルコ人の力がヒジャーズの地で衰退するときはいつも，アラブ人はその服従（という屈辱）に復讐するであろう……。そして，ヒジャーズにおけるオスマン・トルコの支配は，多分，多量の流血の光景とともに終るであろう[70]。

再びとりもどされた聖地ヒジャーズの平和が裏切りの汚名によって特徴づけられていることを，旅行者は言明する。暴虐のアラビアの為政者に対する，トルコ・エジプトの追討が，その初めにおいても，その結着においても，策謀と裏切りで彩られていたことを旅人は表出していた。このように旅行記にしるされた，10年代の中東における抗争，陰謀，裏切りの姿は，20年代のギリシア独立戦争の後，歴史上「東方問題」と名づけられた場面に，少し姿を変えながら現われていると明らかにされている。

ムハンマド・アリーは，ギリシア派兵の後，パレスティナのアクルのパシャ，アブダラに対して，エジプトからの亡命者の引き渡しを要求するもそれを拒否され，そのことを口実にして，息子イブラヒムを司令官としてシリアに派兵，「大胆にも，（彼の方が）初めに，（トルコに対し）甲冑の籠手を投げつけた」[71]。この事件でレバノンの地はエジプトの占拠するところとなり，その後，40年の列強介入によってトルコ領に回復される，という二大支配者の交代という危機を経験した。この二大勢力にはさまれることになったレバノン山地の支配者が旅人達によって注目されている。

当時，レバノン山岳地帯を支配していたのは，マホメットを生んだ古きアラブの部族，コレイシュ（クライシュ）族に由来すると言われている，シェハーブ（シャハーブ）家[72]の首長（エミール）・ベシール（バシールⅡ世，在位1788—1840年）であった。このシェハーブ家はメッカ出身の高貴な家系で，幾人かの教首（シェリーフ）を出し，7世紀の頃，ヒジャーズ地方を出てシリアのハウランの地に移りシャフバ（Shŭhba, Shohba, Shahba と表記される）の町を造り[73]，さらに，十字軍時代，「ヌール・エッ・ディンやサラディンの戦い間に，彼らはこの町より脱出し，リバヌス（レバノン山地）の要害の間にその居を占め」[74]，ディル・エル・カマール（Deir el Kammar, Derr el Kamar と表記，今は Deïr el Qamar）を都[75]としていた，と説明されている。

この都を，ブルクハルトはエジプト軍侵入以前の1814年に，アディソンはイブラヒム到着と同時の1835年に，ウォーバートンはトルコ政府の回復直後の1843年に，それぞれ訪れ，レバノン情

勢について，ベシールについて，そして，その宮殿について語っている。

この事件の舞台となるレバノンの山岳地帯は，キリスト教マロン派に属する人々と，イスラーム教イスマイール派から出たドルーズ派に属する人々とが敵対しつつ居住する土地である[76]。歴史家ギボンに依拠しつつ説明している旅行者達によると，マロン派は，5世紀のシリアの「宗教的狂気をあらわにした」聖人マロンに由来し，ローマ教皇庁に服従するものの，教皇が派遣する特使（レギト）はセクトの主教達が選ぶ総主教に従属しているという。レバノン山地北部のカノビン修道院にあって，その総主教は「専制君主のようにふるまう」と説明されている[77]。これに対して，ドルーズ派は，エジプトのファティマ朝6代目のカリフ，「精神に異常のあった」ハキムを創設者とするセクトであり，そのハキムは「自らを，すべての信仰の久しく約束されたメシアであると宣言し」，彼が天に運びあげられた時，その誠実な信奉者ハムザが地上にとどまりその教えを広めたが，ハムザはエジプトより追放されレバノン山地に避難して，この地にドルーズ派の信条を広めた，と説明されている[78]。ドルーズ派の信仰は「神秘につつまれている」と言われ，その近親結婚，黄金の仔牛の像の崇拝——古代エジプトの神話の遺物，あるいは，イスラエル人が荒野で崇拝したものと同じもの，と説明されている——，信仰をかくすこと，などが旅行者によって強調されている[79]。マロン派が「専制君主」の如き総主教によってまとめられているのに対し，ドルーズ派は常に党派に分裂している，と明らかにされている。その不安定さから，ドルーズ派にレバノンの支配権がわたされることはないという。

> トルコ（政府）は，双方の党派を注意深く処遇し，彼らを完全に圧倒することもなく，彼らの間のバランスを保持した。トルコ人は，キリスト教徒の住人をドルーズ派の住人と対立させ……こうして，この地を平穏な状態に保ち，知事（パシャ）達に従属させ得ている。この政策は，山岳民の荒々しい気質や，類々とした党派間の血讐や，多くの首長達の野心的なもくろみ…にもかかわらず，長きにわたって成功している。知事（パシャ）達は（首長達の）どの一人でもあまりに強力になるのを許さぬよう用心していた。支配者の家系の君主は常に変っていた。党派心は，トルコ宮廷（ポルト）の利害がこの地を必要とした時はいつも，この山岳地に復活した。

1814年，ブルクハルトが宮殿建設中の首長（エミール）・ベシールを訪問した時のレバノンの情勢は，このように説明されている。シェハーブ家は，その家系の高貴さ故に，「山岳地を支配する至当な人々であると考えられていた」が，「多分，キリスト教徒を自らにひきつけようとして，彼らをドルーズ派にある程度対立させようとして，首長（エミール）・ベシールはその家族全員とともに秘密裏にキリスト教を奉じた」という。自らの権力を強化すべく，一方でアクルの知事（パシャ）に接近しつつ，他方，

「トルコ皇帝の直接の家臣となり，知事との同盟を放棄することは，首長・ベシールの内密の努力」であった，とブルクハルトは明らかにしている[80]。マロンとドルーズとの，トルコ政府とシリアの知事達とのバランスの上に立つ首長・ベシールの姿が浮き彫りにされている。

1831年シリアに侵入したエジプト軍は一帯を制圧し，トルコ政府の軍隊を破った。しかし，首長・ベシールは，「ドルーズ派に大きな影響力をもち，しばしば多数の武装した山岳民を戦場に送れることによって，ほとんど独立し」，侵入してきたエジプト軍に対し「彼のとった行動は，常にあいまいなものであって，スルタンの方に傾斜していた」ため，彼とその武装した山岳民は，侵略軍のイブラヒム・パシャにとって「威圧を与える」べき人々であり，それ故パシャは，この山岳民を武装解除し，ベシールを無力にする必要があった，とアディソンは明らかにしている。そこでイブラヒムは電撃的な行動をとり，ダマスカス，ベイルート，アクルの知事達に，山岳地の都ディル・エル・カマールに集合するよう命じ，ベシールには武装解除の命令書を送りつけると同時に，自ら「彼を助けるため」に軍隊をつれて都に登った。このとき，「哀れなエミールは，おどろかされ，熟慮をする前に，圧倒的な軍隊にとりかこまれ，すべての抵抗は絶望的であると知った」と表出されている。人々は山岳地の暴動を予見し，アディソンは事実を確かめに都に急いだという。ディル・エル・カマールで，アディソンは，山岳地を掌握したイブラヒムに会い，ベテディン（Beteddein, Bteddin, Beteddeen と表記，今は Beït ed Dîne）の宮殿に首長・ベシールを訪ね，二人の人物とその置かれた状況を対比的に描いている。

まずアディソンは，普通の住宅に居をかまえるイブラヒムを訪れる。粗末な部屋に居たイブラヒムは，短軀にして肥満，まばらなヒゲ，痘瘡のあばたが特徴的で，「彼に関するすべては，おどろくほど簡素で質素であった」。40才ほどの彼は，刺しつらぬくような目を注いで，すべての者の魂を読みとくといった姿であった。一人か二人の従者のみをつれ，カーペットで身をくるんで荒屋に眠り，「稲妻」と呼ばれるほどに忙しくあちこちとびまわっていたと描かれている。

これに対し，首長・ベシールの居所である「サラセン風の城は，谷の端のけわしい高台の上に位置し，（その姿は）最もロマンティックである」と描写されている。そのロマンティックな，オリエンタルな宮殿での，首長・ベシールとの出会いは，次のように描かれている。

> 首長・ベシールよりも，家父長的で，尊く，堂々とした人物を想像し得ない。彼は上品な老人で，歳は90に近く，…雪のように白い，非常に長いあごひげをつけていた。彼の態度と振舞いは，最も威風堂々として優雅であった……。
>
> （この宮殿）より，著しく東方的な光景を想像するのはむつかしい――大広間の壁は唐草模様が描かれて装飾がほどこされ，部屋のすみには，大理石の泉からちょろちょろと水が流れていた。……

大変興味深い光景であった——エミールの情愛深い父のような振舞いと，静穏で確固たる威厳は，我々を驚かしたが，（それらは）イブラヒム・パシャの意のままの状況に置かれ，その宮殿と首都が，支配下の人々を武装解除しつつ山岳地の諸方面へと侵入している軍人と兵士達によってとり囲まれている，この時の彼の本当の感情とは哀れに相違していたにちがいない。エミールは，クロテンの毛皮で縁どられた高価なローブで端麗に身をつつみ，ダイヤをちりばめた短剣をさしたカシミアのショール（の帯）を腰に巻き，指には指輪をしていた。……
この年老いた族長（ベイトリアーク）の威風堂々とした態度や尊い容姿は，ここにとどまっている間じゅう我々の目を引きつけていた。

みすぼらしい荒屋の，風采のあがらぬ質素なエジプト軍の司令官は，「東方的（オリエンタル）な壮麗さにとりかこまれた美しいサラセン風の城」の中の，威風堂々とした，飾りたてたレバノンの貴人と対比されて描かれている。こうしたアディソンの描写には，「激越な言葉を発し，床を激しく踏み鳴らす」神出鬼没の虐殺者の息子に囲まれ，無口となった「最も完全な紳士」に対する同情がうかがえる。そして，彼の信仰と態度については，次のようにアディソンは述べている。

マロン派のキリスト教徒が山岳地では最も有力な党派であるので，首長（エミール）・ベシールは，マロン派を自らの権威によりしっかりと結びつけるために，自ら洗礼を受けたと言われている。エミールは，表向きはモスレムであることを保持しているものの，キリスト教徒であり，その妻も洗礼を受けたと確言している。彼は良心的なドルーズ派の信者のように，今日はマロン派，明日はトルコ人と姿（を変えている）[81]。

ベシールがイブラヒムに囲まれたことによって，この微妙な力のバランスが危機的状況にあったことが，この表現からうかがえよう。

1843年，ウォーバートンが訪れたベシールの宮殿は，トルコ軍の兵営となっており，その中庭ではトルコ軍のパレードが行なわれていた。

（宮殿は）豊かに金箔がはられ，唐草模様のつけられたいくつかのホールや部屋のある広大な迷路であった。……いくつかの大理石の部屋から，糸杉や天人花（ミルテ）やレモンの木が陰を作る，美しい庭々に出られる。その内の一つに，端麗だが簡素なエミールの妻の記念碑が立っている。彼女は，これらの庭園を大変好んでいて，周囲の谷々を戦乱が猛威をふるっていた間，今その静寂な墓の上を飾っている花々の間で，その人生のほとんどを過してい

> た。エミール・ベシールは，キリスト教徒として，この女性一人を妻とし，彼女は68才で亡くなった。……
> 我々はまず，美しい，淡い色の大理石のパヴィリオンへと導かれた。その中央には，四つの噴水から水晶のように透明な水がアラバスターの水盤へと放出されていた。まるい水盤の縁にそって，切りたての花を入れた花瓶が上品に並べられていた。淡い緑と紫の磁器の屋根が，この快い場所に落ちる唯一の光を照り返していた。

しかし，この宮殿の主人はその息子二人とともに追放されここには居ない。エジプトとトルコとの戦争で，最初中立を保っていたベシールは，侵入軍の勝利が確実となった所で，イブラヒム――ウォーバートンはイシュマエルと誤っている――を「その宮殿にまねき，彼の誠実な同盟者と宣言した」。そして，「イギリスがトルコにこの地を回復させるためにメヘメット・アリをシリアから追い払った時，年老いたエミール・ベシールは，エジプト人との無益な親交の責任をとらされ」，コンスタンティノープルに幽囚された。彼の息子の一人は，知恵の足らぬ故に，宮殿近くに居住することが許され，「父の宮殿に比べて哀れなコントラストを見せる，牢獄のような住居」が与えられていた[82]。この貴人の姿に，落魄の君主の幽囚の姿が重ねられているように思われる。美しさは変らぬ，壮麗な主を失なった宮殿と，巨大な権力にふりまわされ，運命にもてあそばれた哀れな貴人が，対比的にウォーバートンの手によって描き出されている。こうして，力のバランスの上に乗った高貴な君主は，事件の中で孤高で無力の貴人として，そして，事件の後に悲哀の，廃位され追放された老人として描かれてきたことが明らかとなる。暴虐の中東においては，貴人もその暴虐にもて遊ばれることが強調されているとみられよう。描かれたオリエントの壮麗な風景の中で暴虐にほしいままにされる老君主という光景は，ゴシック・ロマンの流行する19世紀イギリスの読者をひきつけるに十分な中東の姿といえるであろう。

アラビア半島中央部では，リアドによるワッハーブ派のサウード家と，ハーイル（Ḥa'yel, Hāyil と表記，今は Ha'il）によるラシード家が，抗争と陰謀にまきこまれていることを，パルグレイヴとダウティの二人の旅行者が描写している。

サウード家のエミール・ファイサルは，次のように描かれている。

> 老ファイサルは……彼が王位を継承した，父（トルキ）と大オジ（アブドル・アジーズ）が，公式の礼拝において暗殺者（アサシン）の短剣で刺されたという運命故に，礼拝時のみならず，非常に臆病になっていた[83]。

「良き，古き紳士の悪徳」である貪欲さがファイサルを支配してきた…が，一方，偽りと

> 裏切りは，長い間のおこないで，第二の天性となっていた。要するに，全くというのではないが彼の中にあった善良さはほとんど消滅し，心と頭脳，知性と意志は同じように，70才の暴君にふさわしく，耄碌に陥っているのではないか，と恐れられていた[84)]。

このサウード家と深い関わりをもつラシード家のエミール・モハメッドも，また，次のように描かれている。

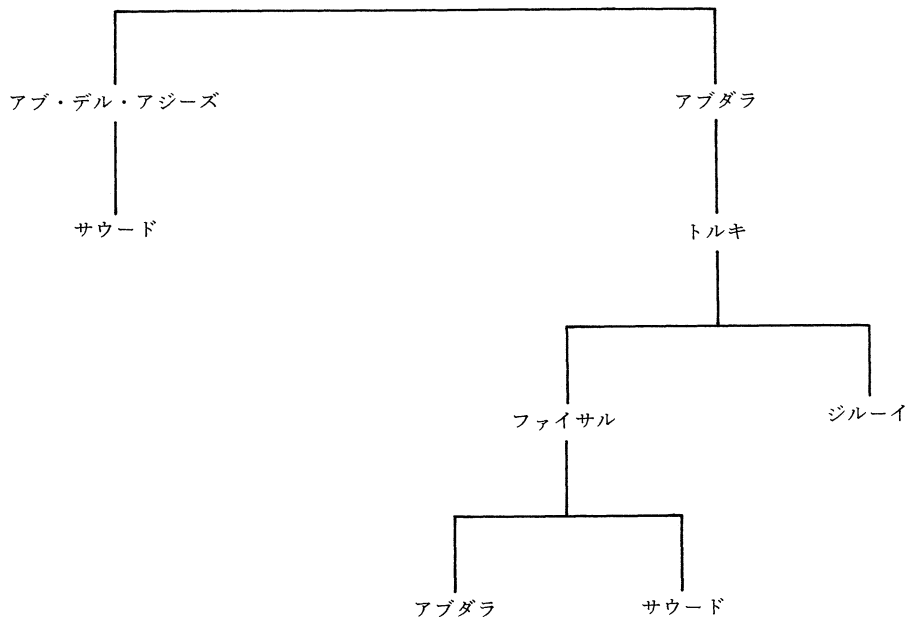
> …モハメッドの鳥のような顔付は，世界の多くの病気を生きのびた者の顔付のようである……[85)]。

> （モハメッド）は常に毒をもられることを恐れながら生きていると言われた[86)]。

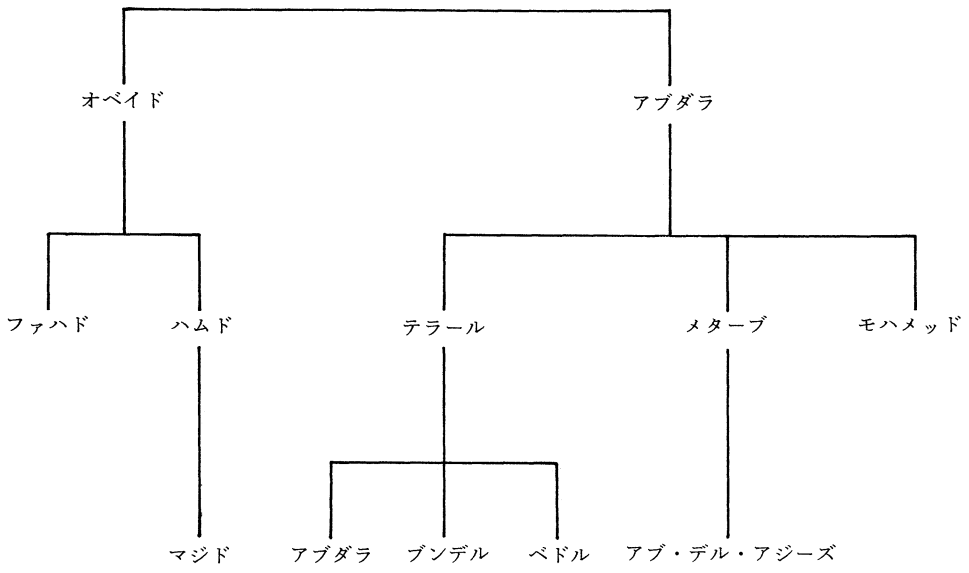
> …（町の人々は）皆彼の姿を見つけると，彼が暴君（タイラント）の剣を持つ故に恐怖する。そして，モハメッドも恐れていたのだ。この君主の家に入った剣は，その家を破壊するまではそこから出てゆかない——アラブ人はそう考えている。彼は，（イトコの）ハムドを除いて，近親者の高貴な首をすべてはねた。…それ故，モハメッドは多くの恐ろしい夢をみているに違いない。彼の全き強固な安全のために，人の報復を常に予期していた[87)]。

両エミールは，旅行者によって，暴君と名ざされ，どちらも暗殺者の影におびえている姿が浮き彫りにされている。そして旅人は両家の暗殺と復讐の歴史を明らかにする。

サウード家のファイサルの父トルキの暗殺とその復讐には，ラシード家のアブダラが関与すると言う。ハーイルの主権をアリー家と争って敗れたアブダラは，ベドウィンの襲撃にもかかわらず奇跡的に助かり，サウード家のトルキのもとに身を寄せ，ワッハーブ派の「重要な部隊長」となり，東方への遠征ではファイサルを補佐するに至る。この遠征の最中，トルキは大モスクでの夕刻の礼拝の時にイトコのメシャレに暗殺された。この報を受け，アブダラは，聖書でのアヒトフェルの役をし，簒奪者に時間を与えることなく「トルキの血がまだあたたかい内に，仇を討つ」よう主張し，「アブサロムよりは賢い」ファイサルはそれに従ってリアドに戻る。メシャレは宮殿に閉じこもるが，アブダラが宮殿内に侵入しその首を取り，ファイサルの復讐が完了したと言われている。ファイサルは「このようにして得られた王位の返礼に，贈るべき王位を」アブダラに与えることにし，軍隊を与えてアブダラをハーイルに帰した。アブダラはエミールとしてハーイルに入り，アリー家に復讐を行なった。アリー家の人々は「徹底的に根絶しにされた」と語られている。しかし，子供が一人生き残り，アブダラの息子テラールが即位すると，「首都の中の



〔表3〕　サウード家系図（旅行記に登場する者達のみ）



〔表4〕　ラシード家系図（旅行記に登場する者達のみ）

立派な屋敷に住まわせ，こうして，敵対する党派の最後のチャンスを取り除く，まれであるが，政治的な寛大さ（で処遇した)」，とパルグレイヴは説明している[88)]。

カシーム地方の併合，シーア派商人への優遇，犯罪者への恩赦が，ワッハーブ派を刺激し，ハーイルはリアドと折り合いを悪くする。そうした状況を，この時期ハーイルに滞在したパルグレイヴは次のように把握していた。

> …我々は，テラールともども，（そのオジでワッハーブ派の）オベイドと（リアドの）ファイサルのスパイ達に見張られていた[89)]。

リアドに対して年毎に馬を贈るのを常としていたハーイルのエミール・テラールは，そのリアド訪問から帰ると病に倒れた。毒をもられたと言われていた。テラールは，その病により「一種のメランコリーな狂乱に陥り」，医者から「知性を荒廃させる長患い」とみたてられ，「彼の高潔な心は，公衆のあわれみの中で生を保つのにたえられなかったのであろう」，ピストルで自殺をとげたという[90)]。これが「ラシード家の悲劇」のはじまりであった。「水に投げ入れられた石が（作る波の）輪が池全体を乱すように」「悪の呪われた本性」として「一人の（男の犯した）過ち」が広がったと説明されている[91)]。

テラールの死後，弟のメターブがエミールの位につき，その「温和な態度」と「並はずれた知力」故に，「威厳と人望」を得ていたが，メターブはテラールの二人の息子ブンデルとベドルによって狙撃され死ぬ。「今やブンデルは君主となったが，位にあったのは1年に満たず繁栄し得なかった。この年，疫病が流行しこの地を荒廃させた」とのコメントが旅人によって加えられている。この時，テラールのもう一人の弟モハメッドはリアドに逃れ，ファイサルの息子アブダラの仲裁をうけ，命を安全にし，その後ハーイルに戻り，テラールのオジのオベイドの息子（モハメッドのイトコ）のハムドの手びきでブンデルとベドルを殺し復讐を達成する。

> モハメッドにとって（他の）選択肢はなかった…彼は兄の息子を殺さねばならなかった。さもなくば自分が殺された…———一族の長の立場に生まれたすべてのアラブ人にとって，滅ぼし尽すということが，支配する重要な野心である。

それ故，モハメッドは近親者を抹殺する。テラールの子供達と，テラールの屋敷で育てられた同い年ぐらいの奴隷達が殺された。「さもなくば，そうした奴隷達は，常に心から進んで彼らの復讐の道具となり得たからだ」と説明されている[92)]。従って，モハメッドは，すでに述べたように，常に暗殺者の手を恐れていたと言われることになる。

しかし，テラールがアリー家の子供の一人を助けたように，モハメッドはブンデルの息子を助けている。その子は，ブンデルが暗殺したメターブの未亡人——つまりオバ——を妻として生んだ子であった。そのブンデルも，メターブを暗殺した時，その子を助けていた。こうした助命を旅人はいぶかっていて，どう評価すべきか必ずしも明らかではないようだ。

> この人殺しの若者（ブンデル）は，当座そのオジの息子を生かしておき，血を流す傷口をそうして癒すことによって，この殺されたメターブの小さなみなし児が成長した時に，自分の身を安全にするよう用心をしていたのであろう——（メターブの息子）は，成長した時，共に育てられた，その異父兄弟の父，義理の父であり，オジであり，同じ祖父母のイトコであり，自らの父をかつて死に至らしめた，正にその男（ブンデル）の命を求めることになったであろうか。そして，今や，モハメッドが，子供の側からの危険は変ったものの，同じ途をとっている。ブンデルの息子が成長した時，（メターブの息子）のために，そして自分の命が助けられた故に，父の首を取ったモハメッドを許すであろうか——しかし，その恐ろしい行いは，人々の目からみれば不正なことではなかった[93]。

不正なことではなく政治的に寛大なこと，と言う他はなかろう。助命は安全保証としては疑わしいものと，旅人は考えているのだから。その危険さ故に，不可解なことと，旅人は，こうした助命をみているようである。決然とした復讐と，不可解な助命を対比的に描くという構図がみてとれる。

サウード家のファイサルによって「キリスト教徒であり，暗殺者かもしれず，呪術者であるのは確か」[94]とされたパルグレイヴは，その二人の息子，アブダラとサウードの争いにまきこまれることになり，その顚末を描き出している。

アブダラは，父親似で，背が低く肥満で大きな頭と太い首をした人物で，リアドでは絶対の支配力をもつとされ，サウードは，背が高くやせ形で美男であり，率直にして寛大な人物で，見世物や馬術を好み，「自由な」党派の人々に大変気に入られていたという。すべての点で対照的な二人は，「互いに平穏に過すことすらできない」ような状態で，ファイサルはサウードを南部地域の統治者としてリアドから引き離すことにした。アブダラがワッハーブ派の正統派の長として立つ一方，サウードはワッハーブ派の厳正主義に反対するすべての者の頭となっていたと言われている。当時，リアドとアネイザは対立し，散兵戦がつづいていたところ，リアドはアブダラを司令官とした大遠征軍派遣を決意し最後通牒を発していた。遠征の留守をまもるようサウードはリアドに呼ばれ，兄弟の対立は顕著となる。その対立は次のように説明されている。

…兄弟の互いの張りあいは，今や近くに戻ることでより一層ひどくなり，形式的な社交儀礼の下に，ほんのわずかにしか隠されておらず，いや，もう隠されなくなっていった。陰謀，背信，暴力それ自身が，宮殿の囲壁の中で企てられ，短剣か，酒杯か，あるいは，コーヒー・カップによる暗殺が本当に用意されていて，（もし，暗殺が行なわれたとしても）誰も少しも驚くことはないであろう。

町の高貴な者達，それに外来者，すべてがこの異母兄弟の一方に味方し，……絹糸のようなファイサルの命が虎達をつなぎとめていたが，ある突然の，特に秘密の（出来事の）勃発（スプリング）を抑止するのに十分ではなかった。

こうした状況において，旅行者にこの兄弟は接近をはかる。アブダラは，とくに，旅人の持つ医学的な知識に興味を示し，サウードは，旅人を「エジプトの密使（エミッサリー）」とみなし，超（ウルトラ）ワッハーブ派のアブダラに敵対する勢力であるエジプトへの好意を示すことで，アブダラが旅人に「反感を抱くようにした」と語られる。こうした間に，アブダラは旅人への疑惑をつのらせ，恩寵を与えて自らの手の内に医者をおさえこもうとして，旅人に対し「首都に永住の住いを持ち，そこで彼の保護を受けるべきだ…とし，すでに，家と庭園を（旅人）に与え，適当な所帯と，つきそう美女を用意する決心をした」と言明し，旅人を窮地に追いつめた。旅人は，アブダラ遠征時にはリアドを離れることにしている旨を申し出，アブダラの提案を拒絶する。ファイサルの総理大臣がサウードに味方し，兄弟の対立が危険になった時，旅人の使ったストリキニーネが評判となる。そこで，アブダラは旅人の出発を認める代りに，ストリキニーネを置いてゆくよう求めた。

彼の本当の目的は全く明らかであった。いかに間接的とは言え，彼の悪魔のようなもくろみに手をかすことはできず，また，いんぎんにではあるがはっきり拒否する他に道はひらけていないようであった。そのため，私は，彼の企図を疑ぐらぬふりをして，（ストリキニーネがもつ）アルカロイドの危険性を主張し，彼は，しばし，その命令をあきらめた……。

そして再度の命令に対し，旅人は，アブダラに耳打ちし，毒物を求める理由を知っているが，その「犯罪の共犯者となる気はない」と拒否した。

彼の顔は文字通り黒くなり，怒りでふくれた。私は，あとにもさきにも，これほど完全な悪魔（デーモン）を見たことがなかった。

旅行者の描き出す暴虐の世界に，ついに，悪魔が姿を現わしたということか。時を移さず夜，旅人はアブダラに召喚される。旅人は，「キリスト教徒で，スパイで，革命論者（ムフシディーン）であり，この地…の宗教と国家を破壊する」ことを目的としているとされ，「すぐさま処刑する」と言いわたされた。しかし，旅人は，「事実感じていた冷静さを示すのに困難はなく」，アブダラの判決を「全く処を得ぬ言葉とし」，この町で「静かな医者としてすべての人々に知られ」「お前の父とお前の客」として受け入れられている自分に対する不当な処置は「歓待の法に違反」し，アブダラにとって「不名誉な行為」となると言明し，その処置がファイサルやサウードや宮殿の者達にアブダラの行為とは知られぬという訳にはゆかぬ，と断言しアブダラを沈黙させた，と自らの姿を明らかにしている。「炉にもえた薪の，ちらちらしたかがやきの他に明り」のない暗いアブダラの宮殿に，雄弁をふるう旅人の面目躍如たる光景が描写されている。毒を求めているアブダラに毒の用意はないと判断し，与えられたコーヒーを飲みほし，「望ましい効果が，完全に達せられた。アブダラの顔が，その敗北を物語っていた」と旅人は結末を明らかにする。旅人がスパイであると「ほとんどうまく言い当てていた」アブダラは「十分に怖気付いた」と語られる。この光景の主人公たる冷静な旅人という姿は，すでに，種々の場面でみてきたものである。そして，虎口を脱した旅人の目の前に，ペスト流行時の中東の都市の暗く重い「色調と彩り」があらわれる。

> 今や深夜に近かった。家々には光はなく，通りにはもの音一つしなかった。空も暗く曇っていた。私は，この時初めて，物淋しい恐怖の感情におそわれた。そして，告白すれば，一度ならずもふり返って，アラブ人の言い方では，手に「悪（イーブル）」を持って追ってくる者がいないかどうかを見た[95]。

東方の暴虐の君主の，悪魔の如き謀略に巻き込まれ，しかも，自らの生を確保して動揺せず，暗い危険な檻より解放される，という言説に，東方の「悪（イーブル）」が浮き彫りにされている。巻き込まれることで暴虐を直接経験でき，自らの力によって解放されることで身を引き離しての描写が可能となっているという，旅行記の枠組みが明らかとなる。疫病も，気象も，暴虐も，このインヴォルヴメントとデタッチメントという枠組みにより，等しく描写されたことになる。

iii　圧制と暴動

すでに述べてきたように，ナポレオン以降にカイロに成立したムハンマド・アリー王朝は，主権の確立，独立，イスラーム世界内での主導権争いといった闘争，抗争の中にあった。そのための軍事力の確立・維持・拡充は，広範囲な徴兵，徴用，収奪をともなった。従って，旅行者達は，

エジプト各地で，強制的な徴兵・徴用の場面に立ち会うこととなる。

バザールやモスクで，人々は官憲の手によって捕えられ，「手首に鉄の枷をつけられ，首に鉄の首輪をつけられて，鎖につながれ」，町や村からカイロへとおくられていった。そうした一団が，ナイルの河畔でも，町のバザールでも，カイロの通りでもみうけられたと語られている[96]。その連行されてゆく人々の姿は悲惨さを極める。

> この光景の陰鬱な印象は，喪服をつけ，引き裂かれた埃や泥にまみれた衣服をまとって，息子や夫のあとを泣き叫んで追いかける，一群の女達によって深められた[97]。

こうした悲惨な世界を現出させるエジプトの支配者は，ファラオの時代以降，最も「徹底した専制君主」であると表出される[98]。全国土を私有化したアリー・パシャは，ヨセフのファラオ，オシルテセンⅠ世と比較され[99]，その収奪が強調され，その後継者達による「課税は，（人々の）生活をほとんど不可能にした」程であった，と表出されている[100]。重税と徴用はエジプトを崩壊させ，荒廃の姿を現出させると旅人は見る。

> （エジプトの支配者は）国のすべての働き手を涸渇させた。…大地は耕地を減じ，村々はみすてられ，家々は廃墟となり，人々は姿を消していった[101]。

> すべての土地は荒廃していた。……無差別な，不法徴収と掠奪は，すでに限界を超えていた。…（人々の）飢えと痛みと労苦は，希望も報いもなく，無力な憤りの絶えることのないにがにがしい（思いにつつまれていた）[102]。

人々の徴発は，軍事上のものとは限らない。古代でも名高い，運河の開削，補修のための徴発は，19世紀でもくり返えされる。アレクサンドリアをナイルと結んだマフムディヤ運河の開削には，25万もの人々がかり出され，２万５千とも３万とも言われる犠牲者が出たとされている。48マイルのこの運河は，１年足らずで完成しているが，こうした「ファラオ達の巨大な事業と競いあう」[103]重要な大仕事は，「この時，政府が完全な専制体制で，一人の意志が至高の法であった，エジプトのような国でのみ達成された」[104]と言明されている。

> 莫大な数の人々が，時間に逆らって，身もだえして仕事しているのを目にするのは，恐ろしい光景であったと言われている。死につつある馬が，その苦悶のうちに地面をかむように，彼らは広大な墓地を開いていった[105]。

その仕事は，「公共の進歩の大いなる一歩として…文明へと努力する野蛮人（バーバリアン）」に栄誉を与える[106]，と旅人は明らかにしている。しかし，その一方で，「モハンメド・アリーの開かれた改革の精神…は，すべてが消え去り全くの暗闇となる前の，大きな突然の輝きにより似ている」[107]とも述べられている。消えゆく灯の最後の輝きである文明の光が荒廃の世界の支配者に握られ，すべては荒涼たる世界に戻ってゆく，と旅人は見ていたのであろう。栄光のファラオの事業が，砂漠の中の廃墟となったように。暴虐の虐殺者は，ここでは，荒廃の風景を作り出す者と考えられているとみられよう。

東方問題とともに，エジプトが，その圧制をシリア・パレスティナにもたらしたことを，旅人達は明らかにする。そこでは，徴兵・徴用とともに，武装解除が旅人によって見つめられることになる。侵入したエジプト軍は，アクルやベトレヘムを廃墟にし[108]，人々を徴発し，荷運び用の家畜を徴用していった。町や村の住人達は「動揺」し，「混乱が広がっていった」と語られる。目撃した旅人は，「彼らが自分の財産の没収に抵抗した場合当局から受ける虐待を目にするのは悲しいことだ」とコメントしている[109]。そして，政情安定のため，すでに述べたように，全シリアは武装解除させられる。「（山岳地の）人々の無法さを鎮圧するため」[110]と説明された武装解除の強行は，後に述べるように反乱をひき起こし，さらに，次のように旅人によって語られている。

> シリアを（エジプトの）大義に反対させ，トルコ政府（ポルト）の活気を失なった不健全な支配をして，この地に再び確立せしめたのは，ただ，この山地民に強制した武装解除と恐ろしい徴兵であった[111]。

徴兵と武装解除による圧制は，結局支配者を変えさせることになったと旅人は見ている。しかし，エジプトがキリスト教徒と結び圧制を効果あらしめようとしたのに対し，再占領したトルコ政府は，ベドウィンを味方として，キリスト教徒の武装解除を強行する[112]。レバノンの地は不幸な首長・ベシールの運命を共にしていた，ということであろう。圧制が形をかえつつも常にシリアの住人の間にあったことを旅人は見つめていた。

旅人は，すでに，アクルで虐殺者による「心痛ませる光景」を見ていた。それは，不具にされた住人達の姿であった。その光景が再び圧制下のシリア各地で目にされる。エジプト軍による徴兵を忌避するために，「若者は自らを不具にし，女達はその子を不具にし」，目をつぶし，指を折るといった「いまわしい」光景が旅人によって語られる[113]。シリアの住民を襲う暴虐が，為政者の恣意によるものとしても，圧制をきらう住民の任意の行為としても，肉体の損壊という姿をとって現われていることを，旅人は明らかにしている。

徴兵忌避の行為は，逃散という形をとることも旅人は見てとっている。イェリコを訪れたスティーヴンズは，この村が全く放棄されており，一人の人間とも出会わず，「10歳以上の男は，司令官と通りがかりのアラブ人以外は一人も居ない」村であることを知る。60人の男達に対し，イブラヒム・パシャは24名を召集，「あわれな住民達は，19名を決めたものの……他の者を供することができず，自暴自棄となって自分達の村を放棄し，10歳以上のすべての少年達をつれて死海周囲の山地に逃げ，そこで今や，彼らは武器を手にし，反乱，掠奪，殺人の用意をととのえていた」とスティーヴンズは明らかにしている。イェリコは，この時，ヨシュアの呪のうちにとどまっていた，と旅人は言表する[114)]。カナーンにたどりついたイスラエル人に門を鎖したイェリコに対する神の呪いを[115)]，エジプト軍の圧制による荒廃に重ねあわせて，この地の動乱の因を明らかにしているようだ。もっとも，逃散は，シリアの町や村の支配者の支配権をめぐる争いで，ダマスカスの知事（パシャ）の影響力をひきつけておくための支配者による貢納がその支配下の農民達への重税を生み，彼らはそれを忌避して村を放棄する，という形でも現われていたことが，ブルクハルトによって記述され[116)]，特定の場所のものではないことが明らかにされてはいる。中東の暴虐は村や町から人々を去らせることで，荒廃の風景を現出させている，ということを旅人は見つめているようである。徴兵・徴用を強制するエジプト軍の侵入は，放棄された村々，荒地化した耕地を生み，交易活動を低下させてゆく[117)]。そして，その末に，反乱・暴動が勃発し，荒廃はさらに増大することとなると旅人は描き出す。

1834年の反乱が詳しく語られている。ナブルース，ヘブロン，ベトレヘム，ハウラン各地で暴動がおこり，アレッポ，ベイルート，アンティオキア，ケスルアン地方へと拡大したことが指摘されている[118)]。一般に，この反乱は，エジプト政府の重税，強制的な徴兵といった専制的行為に帰せられてはいるが，政府の「キリスト教徒に示された恩恵と保護に対する不満」「キリスト教徒巡礼者に対する収奪を禁じられ」たことへの不満，村々への襲撃による掠奪を禁じられたことへの不満といったものが背後にあると明らかにされている[119)]。一方，この地のキリスト教徒は，エジプト側に味方する。

> 現状では，パレスティナのキリスト教徒住民の希望は，強く，エジプト軍の側にあった。……キリスト教徒は，イブラヒムの（反乱・暴動に対する）勝利が，トルコ人の支配に対して，エジプト政府の存続と結びついていたため，その勝利を切望していた。（エジプト政府の支配）下で初めて彼らはモスレムと同じ身分として取り扱われ，以前（のトルコ人の支配下にあった時）には知らなかった，人と財産の権利と安全を味わっていた[120)]。

従って，反乱をおこした者は，「無法者や不満分子」であり，「最も野蛮で，不法で，手のつけ

られない（ヘブロンの）人々」であり，「落着きのない人種で，暴動や反乱をしがち」なベトレヘムのモスレムであり，「無政府状態と無法な掠奪のうまみを味わいたいと望」む人々――ベドウィンやドルーズ派の人々――であった，と旅人達は説明している[121]。そして，こうした無法な暴動に対するエジプト軍の「復讐」が語られる。「（軍隊）で使えるすべての男達を捕え，他の住民はすべて皆殺しにするよう」命令を受けたエジプト軍は，「血なまぐさい衝突と，数多くの死刑の執行」[122]を行ない，各地を「廃墟」として行ったと言う[123]。ベトレヘムの半分であるモスレム地区は「瓦礫の山と黒く煙ですすけた家々」の「廃墟」となり，モスレムは追放され，キリスト教徒の町に変えられ，「イブラヒムのアラブ人に対する憤りの大きさ」が示されていると語られる[124]。そして，いく度となくくり返えされた，掠奪と暴行の世界が描き出される[125]。しかし，こうした鎮圧者の「全く不正で，恐ろしい残虐行為」[126]についての描写は，必ずしも詳しいものではなく，荒涼たる風景の中に現出した，暴虐の世界の表象への加筆といった感を与えるものにとどまる。

レバノンの土地はこうして侵入したエジプト軍の暴虐とそれに対する暴動の後，トルコ再領有となって，1841年から10年におよぶ，ドルーズ派のマロン派に対する騒乱，掠奪，暴行がひきおこされることになる[127]。この一連の事件について，詳しいルポルタージュが，チャールズ・ヘンリー・チャーチル（1828―1877）の手によって書かれてはいるが[128]，旅人によってその悲惨なる荒廃の風景が描かれているのを知らない。ただ，トルコ側がハウランのドルーズ派に対して圧制を行ない追いつめ，ハウランの地の人の住む場を狭めていったことが，ポーターによってみつめられているだけである。

> 地上で，ここで示されたような，このような暴虐，強欲，悪政の致命的な効果のメランコリーな例はどこにもない。耕地，ブドウ畑，牧草地，村々，都市――すべては同じように見捨てられた[129]。

これに対し，エジプト・ヌビアの地の暴動に関しては，それに加わった者達の姿，勃発の因，鎮圧状態が明らかにされている。

1844年，ハルトゥーム（Chartûm と表記，今は Khartoum）で，レプシウスは，南のウェド・メディネ（Wed Médineh と表記，今は Wad Medani）における黒人兵の反乱と，それにつづくタマニアト（Tamaniât）やカムリン（Kamlîn と表記，今は El Kamlin）における工場奴隷の反乱，さらに，アルバニア兵（アーナウツ）による鎮圧を耳にする。この時，青・白ナイル合流点の地方は全土混乱状態に陥り，アルバニア兵による追撃，反乱者の山岳地・タカ地方への避難，アルバニア兵による殺戮，破壊がつづいたことが明らかにされている[130]。鎮圧直後のタマニアトは，次の

ように描写されている。

> 大きな村のほとんどすべてが消滅していて，ただ，広大な燃えた平地が見渡せた。反乱を起した奴隷達はすべてを灰にし，工場の壁のみが残っていた。……私は，まだ煙の出ている廃墟近くで，思いがけない恐ろしい光景に驚かされた。つまり，私は，突然，自分が黒人の多数の死体に完全に覆われた，広い庭園に居るのを知ったのだった。奴隷達の大多数は再び捕えられ，ここで，集団で射殺されたのだった[131)]。

反乱者が逃げたタカ地方は，アルバニア兵の攻撃，収奪をうけ，反乱に関わった者も関わらなかった者も殺されたり，軍隊にとられたり，女達は兵士達に奴隷として与えられたりし，更に重い貢納を課せられたという。貢納の支払がすむと，族長(シェイク)達はすべて捕えられ連行されたが，41人の族長達のうち，旅人が出会った時までに，12人が射殺されていた，と説明されている。旅人の目の前の族長達は，二股となった木に首を固定され，柄の部分に手をくくりつけられていて，「ひどく気力を失って，みじめな様子であった」と語られる[132)]。こうして，圧制，暴動，鎮圧の一連の出来事は，荒廃を生み，悲惨な姿となって，旅人の前に現われていた。そして，その中に，この反乱の主謀者が姿を現わすことになる。

> 彼らのうちで最も地位の高い者は，聖なる者とされていた（シェイク・ムーサ・エル・）ファキール（「貧者」＝修行者）であった。彼の言葉は，この地方全土にあっては，預言者の言葉のようにみなされていて，その神託のような語りと唱導によって，彼は全反乱をひき起こした主たる因となっていた。……彼は老いた，盲目の，力を失った，雪のような白髪の上品な男であった。彼の体は，すでに，ほとんど骸骨であった。彼は，他の者にひき起こされねば動けず，与えられた質問を聞き答えることはほとんどできなくなっていた。……彼は，すえられた，うつろな目で前方をみつめ，私は，このような影（の如き人間）が反乱をひき起こすような大きな影響力を，この地方の仲間の人間に今も与えているのに驚いた[133)]。

ここには，反乱と鎮圧，破壊と虐殺の暴虐の世界が，その因となった，無力の，盲目の老人の姿として，旅人の手によって表出されている。旅人に「不快感を与える仕方で，取りあつかわれていた黒人達」[134)]の反乱が，この盲目の老人の預言で起きたものであり，その鎮圧の結果が，目の前の悲惨，無惨な老人の姿であったのだから。

1865年には，ダフ＝ゴードンが，ケネー（Keneh, Kenne, Kenneh, Qeneh, Qena と表記，今は Qena）

下流の村々での暴動を耳にする。ダルウィーシュのアフマド・エッ・タイーブがエル・マフディー（メシア）であると宣し，反乱を起こしたものだが，その鎮圧は悲惨を極めたものと語られる。多くの者が射殺され，捕えられ，財産を没収され，女達は凌辱され，土地は荒廃したと語られる。圧制が飢えを生み，飢えが反乱を生み，反乱が「厳しい方策」である暴虐を生み，さらにそれが処罰の対象となる「悪」＝暴動を引き起こす，と旅人は説明する。ダフ＝ゴードンは「ダルウィーシュのたわごとを聞くために砂漠へと出かけて行ったこと，そして「風に吹かれてゆれる葦を見る」こと以上に，「反乱に加わった者達」が何をなしたか，私には明らかにできない」とする。しかし，実際彼らに対して何がなされたかについては言明している[135)]。反乱を介して圧制が圧制を生む，という暴虐の世界が，こうした旅行者の記述に強調されているのは明らかなことである。こうして，すでにふれたように「すべての土地は荒廃していた」のであり，旅人の目の前には荒廃の風景の中の暴虐の姿が浮びあがる，という構図ができあがる。

3. 社会関係としての暴虐

i 図 式

アナゼ族（Ánazeh, Aeneze, Anezy, Annezy と表記）の族長（シェイク）・アメルをエスコートとしてパルミラへ向っていたポーター一行が，途中，好戦的なエル・ミスラーブ族（El-Misrâb）の一団に捕えられる。二人の男に行く手を阻まれ，エスコートは抵抗せぬまま一群のベドウィンにかこまれる。「土埃の雲が平地の向うから横切って来て……，すばやく，着々と我々に近づいて来る」火器で武装した30人ほどの騎馬の男達は，「野蛮で獰猛な顔つき（をし）……癇の強い裸馬の背にしがみつき，粗野な武器を振りひらめかせ，人間達というより悪魔（デーモン）のように見えた」，と描写されている。荒涼とした砂漠の風景の中に，再び，悪魔（デーモン）が登場する，旅人に「強い心配」を与える暴虐が姿を現す。その敵対の姿に対して，エスコートの族長は後ろに退き，ドロメダリー（騎乗用のラクダ）をおり，旅人の乗る統御し難い「キホーテの如きドロメダリー」は一行の先頭に立ってしまい「敵と対面する意図」を示すこととなる。そして，敵は左右に別れ，その中を，「絹のローブと緋色の外套をまとった頑強な男」が，長槍をふりかざして先頭の旅人をめざして向かって来る。急ぎポーターは，外套をぬぎすて，ヨーロッパの服を見せると，族長がそれを認めて傍にそれ，難をのがれたという。「ヨーロッパの服は，一種の魔よけ（チャーム）のような働きがあるようであった」と説明されている[136)]。時には憎悪の的，信仰の敵の象徴となるヨーロッパの服装は，この危機的な時にあっては，緊急避難の呪術的な手段となると表出されている。すでにみたように急激に相手の力をそぐものは，呪術的効果をもつ，と表現されることが多く，旅人側の力というより，相

手の暴虐の悪魔性への対抗の強調とみられよう。敵の暴虐の姿が，旅人の姿＝服装（つまりは文明）と対比されているのは明白である。

そこで敵の族長はアメルに向って槍をくり出すが，巧みにさけたアメルは族長を馬からひきずりおろし，組み打ちとなり，人々がとめに入る。旅人一行は「囚人」となるが，「身には攻撃される危険はなく」，旅人は「完全な無頓着の風を装う」ことになる。族長同士の激烈な争いに対し，旅人の平静さが，ここでも対比的に描かれている。二人の格闘はその後もくり返され，「流血に終る」危険を旅人は感じていた。

エル・ミスラーブ族のキャンプで事件は話しあわれ，彼らは旅人に対しエスコートの権利を主張，案内料と旅人の所持するピストルを代償に求め，それに対して旅人はすべてを拒否し，ダマスカスに戻らざるを得なくなるに至る。争いは，ベイルートの領事からエル・ミスラーブ族の族長に二人の旅行者のパルミラ行のエスコートの依頼があり，その当の旅行者がアメルによってエスコートされて現れたとみた誤解が原因であった，と説明されている。この誤解はとけたものの，権利は主張された。しかし，族長は，ダマスカスへ戻るとの旅人の決意をみてとり，戻ってイギリス領事にパルミラ行妨害が報告されるのを恐れ，300ピアストルで遺跡訪問を許可し，案内する[137]。

パルミラ訪問を終えたポーター一行は，ダマスカス手前の町カリアテイン（Kariatein, Karyatayn, Karietein, Cariatein, Kuryetein と表記，今は El Qaryatein）で，二人の旅行者を迎えに出てきた，エル・ミスラーブ族の族長の弟がアメルの部族の者達に見張られているのに出会う。ポーター一行が捕えられ，アメルが殺されたとの噂が広まり，エル・ミスラーブ族の者を阻止すべくこの町に送られた彼らは，「アメルの死が本当であることが分かれば，血の復讐を行なう」ことになっていた，と説明されている[138]。そして，血讐の社会的意味が，次のように解釈される。

> （人の死に対し血の復讐が行なわれるという）ことが，砂漠の法であり，それは，ベドウィンの激しい感情をみごとに抑え，流血を阻止するのに役立っている。部族間に血讐が起きれば，血讐はほとんど果てしない。「血には血を」という恐ろしい宣告が，すべての人々の頭上にまとわりついている。……それ故に，どんな掠奪行や報復が行なわれても，血が流されぬよう最大の注意が払われることになる[139]。

それ故，アメルは傷つけられることはなかったのだ，と理解されることになろう。しかし，血讐の掟は，常に激情をさまさせ，抑止力として作用するとは限らない。旅人による，もう一つの危機の描写をみてみよう。

ポーターをエスコートしたアナゼ族は，アラビア半島における全部族の中で最大の部族である

と言われ，「神はアナゼ族を増し，神はその内に分裂を定められた」という諺があるように，多くの支族に分かれ対立している，と言われている。「ある親族の者達が，他の親族の掠奪者，敵ではないような時はない。アナゼ族はイスラエルの民に比べられている」とダウティは述べている。そうしたアナゼの同族の対立する部族，ウェラド・アリー（Wélad Aly）とビシュル（Bishr）が，同時に相手を襲撃し戦闘を行なう，という事件が明らかにされている。80人のビシュルの襲撃隊（ガーズー）と120人のウェラド・アリーの襲撃隊（ガーズー）が「荒野で互いに出会」い，「それは，軍歌をうたいつつ，高い鞍の上で身をかがませて，武具をきらめかせた腕で，ドロメダリーの首にしがみついて忍び乗る，といったすばらしい光景である」としるされる。ウェラド・アリー族の戦闘指揮官は「未熟な若者」であるファハドで，彼はこの戦闘でビシュル族の戦闘指揮官でイトコ（互いの母親が姉妹であった）のアスカールを槍で刺してしまう。しかし，「この地のベドウィンの中で最も体軀の大きな，果敢なビシュル族の者達に圧倒され，ウェラド・アリー族は「戦場で過度の恐慌にとらわれ」屈服し，数人の族長達を除いて，捕われることとなった。しかし，これまでの血の復讐は覚えていても，ビシュル族はその同族の者達を殺すことなく，「解き放ち，着衣のままで，素足のまま騎乗させ，その妻達のもとへ帰らせた」と記述されている。しかし，アスカールを刺したファハドは，ビシェル族によってそのキャンプに連れ去られる。

> もしイトコ（のアスカール）が，（ファハドによってつけられた傷で）死ねば，その最も近い親族の者が血の代償を受けとることに同意しない限り，（ファハド）は，その（イトコの）死のために，死ななければならない。（その生死が明らかになるまでの）間，彼は，その敵対する同族の者達のテントの中で客として過ごすことになろう[140]。

古い血の復讐故の流血は，あえて求められないにせよ，目前の血の復讐は，傷を負った指揮官の死が定かならぬ故，保留され，加害者は来るべき償いのために捕えられることを旅人は明らかにしている。こうした旅人の記述において，古い血讐が部族間の敵対関係の基礎にあり，それが襲撃（ガズワ）を生み，さらには，再び流血と新たな血讐を生む，という図式が読みとれる。

戦闘が一段落すると和平が協議される。ベドウィン社会一般のそれと血讐の関わりについて，バートンは次のように表出している。

> 平和が達成されると，両グループは死者の数を数えあげ，どちらかの側の超過に対して，常の血の代償（ブラッド・マネー）（の支払い）が行なわれる。しかしながら，一般には，すべての者が疲れはててしまいメッカの教首（シェリーフ）のような重要人物が単に休戦にしかすぎない（和平）協定の条件を確定させるために呼ばれるまで，血讐は続けられ，数ヶ月の平和の後，（ちょっとした）

一瞥や，（ふとした）一言が，（再び次の）殺戮を生むことになる。何故なら，こうした（お互いの）憎悪は昔からのものなので，新たな衝突はそれから簡単に生まれる[141]。

流された血の賠償は容易には確定されず，またそれによる平和も永続的なものではないことが明らかにされている。

基本的には，厳格に励行される「血讐の法」とは，殺された者の最も近い親族の男が殺人者を機会があり次第殺す，というものであり，また，高額に設定されるとは言え，金銭的な償いが支払われ，受け入れられる場合がある，と言われている[142]。報復か代償かは殺された者の家族に選択権があるが，報復が企てられた場合，殺した者の兄弟，息子，イトコがその代わりとされ得る。従って，身内の者が殺人を犯した場合，殺人者はもちろん，家族全員逃亡することがあると言われており[143]，ベドウィン社会では，こうした逃亡は受け入れられていると説明されている。

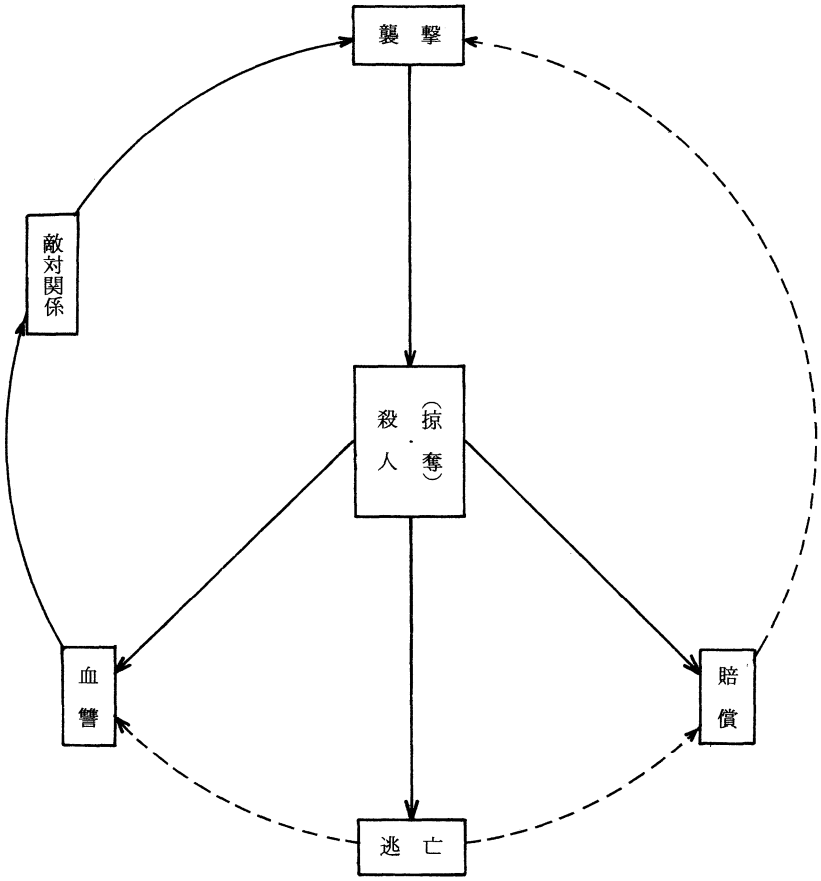
（ベドウィン）は，殺人の罪を犯すことを，人間の交わりにおける汚点というより，人の一生における不運であると考えている。（他の）部族（のキャンプ）や町に逃亡した殺人者は，公の歓待をもって迎えられる。無一物で来訪した者で，宿舎を借りることのできぬ者には，宿舎が与えられよう。慈善心に富んだ者はその者を食事に招く……。彼らの目には，彼は放逐（破門）された者ではなく，不幸な亡命者である。彼の過ちは人間に対するもので，神に対するものではなく，彼は神に対し不敬を働いたわけではない（とされる）[144]。

もちろん，逃亡は解決ではない。血讐の関係は永続化し，賠償要求は保留されるにすぎない。こうして個々のケースと，部族間のケースは，同一の図式として把握されていることがみてとれる。それを，ここでは［表5］のように整理しておくことにしよう。

ii　血讐と賠償

ナイル上流のシェンディ付近では300か400ドル，アラビア半島では800ドルと言われる血の代償が，殺された側の同意にもとづき支払われる。ヌビアの地では，血の代償の受け取りは，アラビアでのように，「彼らを不名誉にさらすことはない」と言われている[145]。そして，アラビアでの代償受け取りは，バートンによって，次のように説明されている。

（血の代償が受け入れられる）場合，貪欲と復讐という，アラブ人の二つの好みの熱情の衝突から，激烈な光景の数々が生ずることになる。「血の復讐者」は敵の喉を断つことを



〔表5〕　血讐，賠償，襲撃

望む。その反対に，自らを富ます好機を，どうしてむざむざ見のがせよう。彼の貪欲さは，彼のすべての熱情と同じほどに，激烈である。彼はいつも，新しいドロメダリーを買う計画，あるいは，すばらしい仔馬に資本を投ずる計画を持っているのだ。そしてその結果，彼は貪欲である（ことを示すことになる）。それでも，彼は，血の代償の金を，恥と感じつつ受けとる[146]。

不名誉とか恥とされても，命のやりとりより富が優先される。ベドウィン達の「血讐は絶え間ないが，ほとんど命が犠牲にされることはない」と言われ[147]，「砂漠では，貪欲さや血に飢えた性向がすみやかに増大するが，同様に，文明の無謀さはここでは知られていない」と語られる[148]。

しかし，こうしたことも，個々のケースで一般的に言われるにすぎず，部族間の衝突となると話は複雑となる。たとえば，ダウティは，次のような説明を加えている。

…互いにラクダを掠奪しあっているだけの敵対する部族間では，血の代償が許されぬことはない。フェジール族（Fejîr）とベニ・アティエ族（Beny Atîeh あるいはマアザ族，Ma'azah, el-Maazy）との間でのように，血讐ある所では（血の）代償はあり得ない。昔の殺人に対する彼らの心の内にある炎は，幾世代も（燃え）続け，その敵の手に落ちたどちらの側の者も，救済されることなく，殺される危険にさらされる[149]。

古くからの敵対関係を形づくった血讐は忘れられることはなく，新たな血讐も敵対関係を新たな危険なものにするということか。ベドウィン諸部族の複雑な敵対関係の一つ一つが旅人の前に現れる。

iii　敵対関係・襲撃・和平

種々の部族の関係は，たとえば，次のように表出されている。

ホヴェイタト族（Howeytat, Haweitât, Huwaytát）はシェラ山地（Shera, Es Sherah, esh-Sherah, 今は Esh Sharā）全体を占め，アカバに至り，南は，アカバからエジプトの巡礼道路を５日（行った）モイェレ（Moyeleh，今の Muwaylih か）へと広がる。東は，アカバ・エル・シャミィあるいはシリアの巡礼道路のアカバにキャンプする。北部ホヴェイタト族は，冬期，ゴールを居住地とする。この山地での彼らの立場の強さが，東のアラビア砂漠にキャンプするベドウィンの多くの遊牧民の群の攻撃から，彼らを安全にしている。しかし，彼らは，

彼らと絶え間ない戦闘を行なっていた，ネジド（Nedjed, Nejed, 今は Najd）の平地に居る彼らの敵のキャンプを奇襲すべく20日間の遠征を企てることがある。ベニ・サカル族は，この地を理解しているため，彼らに最も恐れられており，この二部族間の平和はほとんど永続しない[150]。

このシェラ山地とは，聖書のセイルの山地であり，すでに述べた，神の怒りによって荒廃したエドムの地のことである。ホヴェイタト族は，神の怒りの風景の中に，ベニ・サカル族と敵対関係を作るものとして登場していることになる。

ホヴェイタトの地の北はモアブの地，エル・ケレクであり，ベニ・サカル族はその北に居を占める。そこは，古代アモリ人の王の領土であり，イスラエル人に敵対した王シホンの罪故に，イスラエル人のガド，ルベン，マナセに与えられたギレアドの地である[151]。アラブ人は，そこをエル・ベルカ（El Belka, El Belqa）と呼んでいる[152]。ベニ・サカル族によるこの地の占有は，次のように説明されている。

多年，（ベルカ）地方の主要部族はアドワン族であったが，今や彼らは，宿年の敵ベニ・サカル族によって，最も劣悪な状態へと力を減じられている。（ベニ・サカル族）は長年オェラ（Oella，今の El 'Ula か）近くの巡礼（ハジ）道路上に居住していたが，ワッハーブ派の力の増大によって，北の方へ退かざるを得なくなった。彼らはベルカに近づき，当時，この地方のすばらしい牧草地を占有していたアドワン族から，年毎の少額の貢納で，その家畜にこの地で餌をやる許可を得た。（ベニ・サカル族は，アドワン族にとって）危険な隣人であることが，すぐに分った。ベルカの他の諸部族の大部分を，アドワン族との同盟から切り離し，最後に，彼らは，（アドワン族）をゼルカ川（Zerka）の（北へ）追いやることに成功した……。

アドワン族は，ダマスカス政府とアナゼ族の一支族ロワラ族（Rowalla, Ruwàlla, Roála）と結んで，ベニ・サカル族を攻撃したが，12名ほどの騎兵と２千頭の羊を失い。こうして，ベニ・サカル族とアドワン族は宿年の敵対関係を持つことになったと言う[153]。エドムの荒廃の風景とは異なって，ギレアドの風景は，香しい松と月桂樹の森林地帯であり[154]，「美しいオークと野生のピスタチオの木々が，いずこでも，心地良い木陰を作り，シリアの地で私が見たどこよりも，ヨーロッパの風景に似る」[155]，と描写されている。美しい風景の中のすばらしい牧草地，聖書に，家畜を飼うに適した土地とされたベルカの地に[156]，部族は敵対し戦いあい，旅人は自由な旅を阻まれる[157]。

これらアラブ人と（ダマスカスの）知事（パシャ）とが敵対しあっていると，旅行者は掠奪される危険にさらされる。そして，もし二つのパーティの怨恨が非常に深ければ，殺されるほどの（危険にさらされる）[158]。

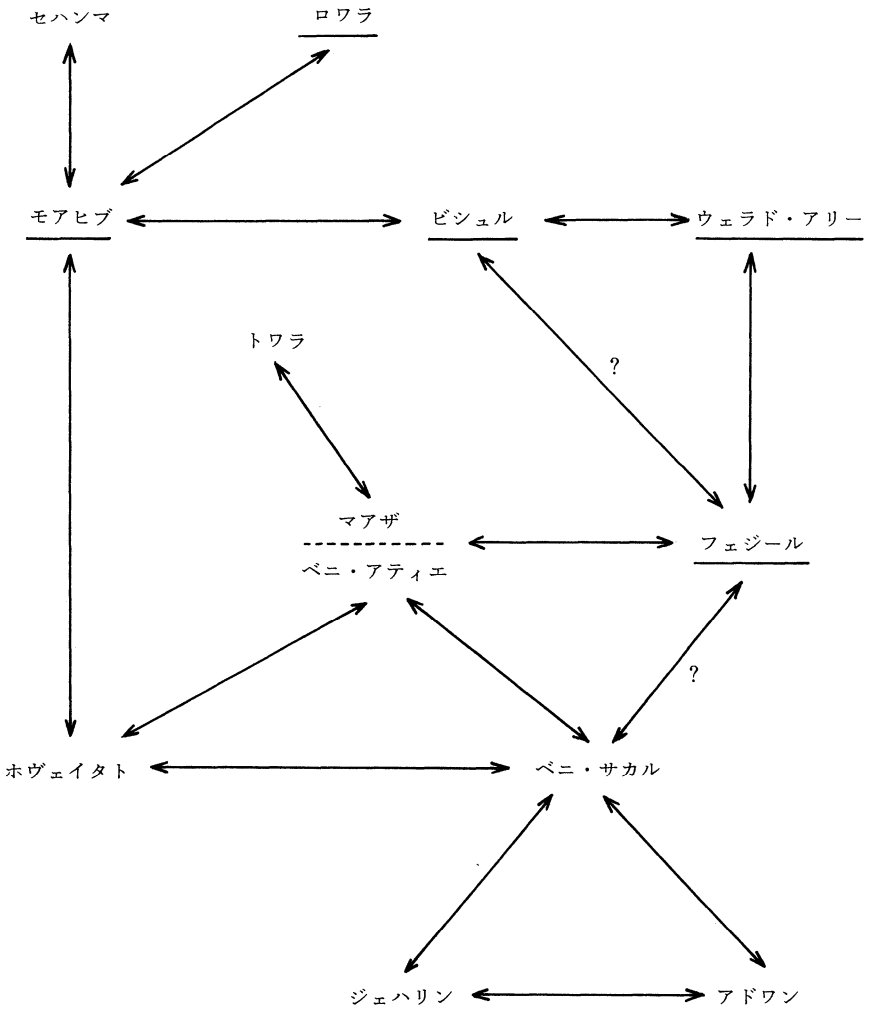
ホヴェイタトの居住地の東方にはマアザ族が居住する。

（マアザ族の居住するヒスマ（Hismá）の地）は，そこへと道をとれたすべての殺人者と盗賊達にとって避難所（アザイラム）——周囲のすべてのものに災いをまき散らす狂暴の中心である。卑しむべきシャム（シリア）の偽りの支配のもとで……諸事はさらに悪くなるにすぎない。……

彼らの隣人にとって幸運なことに，マアザ族の力を減ずるのに困難はないようである。彼らは敵にかこまれていて，最近，ロワラ族に対して，掠奪されることから護るべく，「兄弟税（友好の貢納）」を支払わざるを得なくなった。……彼らは，北では，マアーンに至って敵対するベニ・サカル族…にまみえる。南ではバリィ族（Baliyy）が…彼らの２千頭のラクダを欲しがるアナゼ族と，好戦的なシャララトーフタイム族（Sharárát, Sherarat と Hutaym, Heteym）が攻撃の姿勢をとっている。西では，彼らの宿敵であるホヴェイタトが待ち伏せている。……最後に，訓練された小隊が，ダマスカスーメディナの巡礼道路を下って来て東にまわり，西のホヴェイタトと協同して，この寄生虫をはさみ撃ちにしようとしている[159]。

こうした，ベドウィン諸部族が，種々の風景，環境の中に，敵対する部族にとりかこまれている，という記述のパターンを旅行記に見取ることは容易である。神の怒りの荒廃の中に，その風景にふさわしく敵対し，豊かで涼しげなヨーロッパ風の風景の中でも，その否定的要素の如く敵対する諸部族が中東の空間を占有する，ということがこうした記述の中に浮かびあがる。豊饒と荒廃の風景の中の敵対する諸部族の関わりを，旅行記の中の多くの記述からピック・アップしてみると，たとえば，［表６］のように整理して示すことができる（？をつけたものは，敵対関係が否定されるような表現もみうけられるものだが）。この表示は，決して敵対関係の事実なるものを表示するためのものではなく，旅行記の敵対関係の記述の構図の一つを明らかにするものにすぎない。

敵対関係にある諸部族は相互に襲撃しあい，ときに，戦闘に至ると説明される。たとえば，隣接する諸部族の中には，フェジール族とベニ・アティエ（マアザ）族のように，古より「残虐な敵対をつづけ」「その一方を絶滅させることによって，永きにわたる争いの数々を無効にせんとする」部族関係が認められるとされる。その血讐が指摘され，他の部族を「絶滅させようとする



(注) 下線をひいたものはアナゼの一族

〔表6〕 ヘドウィン諸部族間の敵対関係

アラブ人の本心」が語られる[160]。しかし，フェジール族とベニ・アティエ族の敵対と襲撃についての具体的な記述には，敵対のはげしさを示すものを認めることができない。

メダイン・サーリフ（Medáin Sâlih と表記，今は Madā'in Ṣāliḥ）の砦の羊と山羊がベニ・アティエ族9人の襲撃隊に盗まれる。報告者は，町の指揮官が守備兵とともに出発したのを見とどけた襲撃隊が姿をあらわして盗みを行なったものと知らせる。しかし，後に，彼らがキャンプした場

所に5頭が食べつくされたあとが発見され，ダウティは，このベニ・アティエ族の襲撃行を次のように説明する。

> （襲撃行の）2週間にわたる恐ろしい疲労の後で，この食事で彼らは元気を回復し，帰途についたであろう。こうした毎日を盗賊として敵対する（部族の）土地をさまよい，彼らは自らの命を危険にさらしていた。しかし，彼らは，不確実な掠奪物を求めて，そうした労苦を機嫌よく引き受けていた…[161]。

ここには，こそこそと放浪する盗賊が，砦に居住するフェジール族の庇護を受ける者達から羊や山羊をうばったことが語られてはいるものの，殲滅行動をくり返す部族関係は浮かびあがりはしないであろう。数ヶ月後の，フェジール族のベニ・アティエ族への襲撃の言及も，100人の騎馬の者による，30頭のラクダの盗み，という以外は何も語られていない[162]。

図式の項で言及したように，アナゼ族同士は互いに敵対しあっていて，ときに，襲撃隊同士の戦闘となることがあった。ビシュル族への襲撃に向かうウェラド・アリー族には，紅海東岸東のハラ山地の山岳民，モアヒブ族（Moahîb）の三人の男が「共通の敵（から）の掠奪物の分け前を期待して」加わっていた。その仲間のウェラド・アリー族敗戦に際して，彼らは脱出に成功している[163]。しかし，数ヶ月後，モアヒブ族はビシュル族の逆襲を受け，そのすべてのラクダを失う羽目に陥っている。それは，モアヒブ族の二人の族長が，ハーイルのラシード家へ「へり下って，服従」を誓い，貢を納めに向かっていた時におこり，モアヒブの人々は「1時間のうちに，彼らの生活の資のすべてをうばわれた」と語られる。帰途についた二人の族長は，ビシュル族の族長のテントに客として受け入れられ，彼らを「まる裸にした」者の口から，その家の惨禍を耳にすることとなったという[164]。一夜のテントの中に，敵対と歓待が入りまじる，砂漠の世界が語られている。襲撃が逆襲撃を生み，歓待のキャンプに自分達の家畜があふれるのを目にすることが，中東のキャンプ風景となっている。

> （ベドウィン達）の襲撃と逆襲撃は遊牧民を破壊するものである。彼らは，掠奪を行ない，また，掠奪されて，決して繁栄することはなかろう。すべての栄枯盛衰の結果として，それは，家畜の有害な交換である[165]。

襲撃と逆襲撃が，正統な家畜の交換＝交易を阻み，衰退へと向かう有害な交換を生んでいると説明されている。この有害さをなくすべく，ときには，襲撃と逆襲撃は和平に至ることがある。

シナイ半島のスエズ近くの涸れ谷で，マアザ族とトワラ族とが戦争を行った時——1808年頃の

こと――エジプトの東部を占めるマアザ族（アラビア側のものと同族）が，200頭のドロメダリーと，９頭の馬に乗って，トワラ族のキャンプを襲撃した。この時，辱めを受けるのを肯じないトワラの族長を含む二人，あるいは，７，８人の男が殺され，多数のラクダ，数人の奴隷，多くの衣服と家具が掠奪されたという。３ヶ月復讐の機会を待ったトワラ族は，500頭のドロメダリーに騎乗する者と歩兵100人で，マアザ族のキャンプを奇襲し，族長を含む24人を殺し，70頭のドロメダリー，100頭のラクダをうばい，さらに続けて二度の遠征をトワラ族は行ない，20人が殺されたという。そこで，マアザ族は，有力なホヴェイタト族の族長に３頭のドロメダリーを贈って和平の仲介を依頼し，その族長は，ムハンマド・アリーに事件を訴え，アリーによって和平が成立したと語られている[166]。仲介の仕方，また，和平の条件，交渉の進展等の詳細は述べられていないが，有力なベドウィンの族長の仲介では和平は成らず，エジプトの総督（パシャ）の力に依らざるを得なかったものと思われる。すでに，図式の項で引用しておいたように，重要人物の登場によって和平の条件がととのえられて，ともかくも，有害な交換が阻まれたと知られよう。しかし，パシャや教首（シェリーフ）のような重要人物が，敵対関係の製作者，企画者，当事者となることがあるとの指摘もある。それはイスラーム教徒の聖地，ヒジャーズ地方の大盗賊の話として語られている。

北部ヒジャーズの鍵を握る部族[167]，ベニ・ハルブ族の主要な支族ハミダの族長サアドは，その支族のすべを支配し，それによって全ベニ・ハルブ族の支配者となり「事実上の聖地の専制君主たらんとした」が，メッカの教首（シェリーフ）とトルコ人知事は，その政治力を貶め，次位の族長ファハドをそのライバルの地位に高めるに至る。サアド側は，その族長に与えられた「侮辱」に憤り，ファハド側を襲撃，ファハドはトルコ政府の後循で敵の兵站線を断つ挙に出る。

> 両者とも，同じように，野蛮で向こうみずであり，……共に騎兵達を射殺し，旅行者を掠奪し，道をとざす機会をとらえている。……メッカの教首（シェリーフ）は，盗賊の首領に対し，自ら戦場に出ようと企てたと言われている。

ヒジャース地方の道は安全ではなくなり，敵対する者達の全面衝突が懸念されるに至る。メッカ巡礼によってはこばれるスルタンのラクダ輦（マフミル），「帝権の力の徽章」もサアドによって追い返されるという大混乱に，この時，聖地は陥っていた，と説明されている[168]。

ベニ・ハルブ族の人々は，「利に貪欲で，復讐の念に満ち，けんか好きで，気違いじみた勇気を示す」と言われ，さらに，次のような姿であると描写されている。

> これら戦の子（ベニ・ハルブ）の風采（アウター・マン）は賤しむべきものである。発育のとまった，やせた小さなチョコレート色の体，日にやけた褐色の，粗いぼうぼうとした髪，まばらなヒゲ，

険悪な目つき，ひそめた眉，鋭い声，形は良いが細い四肢[169]。

そして，その指導者サアドの姿と特徴が描写される。

山の老人サアドは，背の低い，褐色のバダウィである，と描かれている。その風体は賤しむべきものであるが，その勇気と即座の分別は注目すべきものだ（という）。彼は陰謀に対し実地に保持する必要のあるするどい嗅覚を持つ。彼のオイを殺した，今のメッカ教首（シェリーフ）アブド・アル・ムッタリブとの血讐と，幾人かのスルタンとの敵対が，彼の人生を多事なものにしていた。……
彼の特徴については，いつものように，人々は二つの話を語っている。ある者は，彼の慈しみを称賛し，富者の敵であると同時に貧者の味方と呼ぶ。それに反して，他の者は，彼を残忍で冷血，アラブ人の間でも著しく復讐の念に満ち，貪欲である，と描写している。多分，真実は，この極端さの間にあろう……[170]。

この山の老人は，暗殺教団長の如きパラダイスには関わりを持たず，血讐と暴虐をもって，義賊伝説の生成の入口にいるようだ。支配の陰謀が暴虐を生み，イスラームの聖地を暴虐の風景と野蛮な人々の姿で満たす，という旅行者の言表が理解される。

重要人物の介入がなければ，危険がないかわりに和平はまとまらないことが表出されている。

セハンマ族（Sehamma）とモアヒブ族との戦いでセハンマ側に死者が出，その時５頭の雌ラクダが血の賠償として支払われたものの，その族長マハンナはそれを不服とし，40頭の雌ラクダを要求してモアヒブ族のキャンプを訪れた所から，賠償交渉についての旅人の記述がはじまる。族長達は「穏当な示談」に応ずるふりをするものの，モアヒブ族の一族の族長が反対をとなえたが，17頭のラクダと多数のシュロの木が提案され，交渉はまとまりかける。

しかし，今や，マハンナはすべての申し出を拒否し，「遊牧の民はその血讐に戻り，その間には黒い死以外に何も残らぬ……」と叫んだ。マハンナは騎乗用のラクダに乗りくびすを返し，別れもつげず，谷奥へハラ山地をこえた家へと向かった。そうした外見だけの厳しさは，ただ，より多くのラクダ（の提案）をひき出すための，この男の機略であった。おまけに，みせかけの困難さ（を示すこと）なしに，そうした重大な問題を解決することは，自らの名誉ではなかった。モアヒブ族の者達は，確かに，この事態を期待していたので，彼らの水場へと散って行った[171]。

交渉につきもののかけひきが，外見だけの，みせかけの姿をとってあらわれていることが，この描写では強調されている。偽りの交渉，それこそ有害な，従って誤った交換の末にはふさわしいということか。すでにみた，旅人とエスコートの族長との交渉の表出の際の旅人の姿とは対照的と言うべきであろう。うわべだけのベドウィンの族長の姿と決然とした旅人の姿という対比的な言説を把握することは容易であろう。

こうして，重要人物の仲介を願い，ひくにひけぬみせかけの交渉から族長達は解放される，という構図が導き出されよう。そうした人物として，旅人自らが旅行記の記述の中に登場する。まずは，意図せぬ仲介者としての旅人が語られる。

古代ユダ（ユダヤ）の南部を占めるジェハリン族はエドムの地のベニ・サカル族と敵対関係にあると言われ[172]，ソルシィがこの地方を訪れる数ヶ月前に，ベニ・サカル族のキャンプを襲撃，12頭のラクダを掠奪していた。それ以降両部族は，「その交際を小銃の発射に限っていた」。

> 人も家畜も失うこととなった，絶え間のない小ぜりあいにうんざりしたジェハリン族の族長は，我々の訪問を利用して，彼が攻撃した強大な部族に対し和平を提案するという，運の良い考えをいだいた。

ベニ・サカル族のキャンプでは，うばわれたラクダの所有者が和平を声高に叫び，ラクダの返還が宣言された。襲撃の賠償にみあう「心付け（バクシーシュ）や贈物を思うままにねだり取れる，律義（オネスト）な人々」である旅人をジェハリン族がともなったことで，和平をベニ・サカル族が受け入れたのであろうとソルシィは「推測」している。

> 次第に，我々のまわりで，すべての騒ぎは静かになっていった。ラクダの低いうなり，犬の吠え声，露営のたき火のはぜる音の他は，すべては静かになっていった[173]。

夜のキャンプでの騒ぎ，賠償・返還の宣言（返還を受ける側のものだが），そして静寂化といった事態の推移に，自らをだしにした和平がかぎとれるというのが，旅人が明らかにしていることのすべてである。襲撃・血讐・逆襲といった暴虐の世界では，和平といえど収奪という暴力によってのみ達成される，という言説をこの表現の中に見てとれることができる。心付けは，すでにみてきたように，盗み・掠奪の一形式として旅人達に受けとめられていたのだから。現地の人々の強欲さの標的となることで敵対者を仲介する役を旅人がなしている，という構図をみとめることは容易である。これに対し，旅行者の方が積極的に和平の仲介者たらんとした場合を，ブラント夫妻の旅にみることができる。

アレッポに到着し，イギリス領事にむかえられたブラント夫妻は，アナゼ族の支族セバー族（Sebáa）の一支族ゴムッサ族（Gomússa）の族長メシュール・イブン・メルシィドから招待のメッセージを受け，セバー族と同族のロワラ族との戦争状態についてのニュースを得た[174]。その後アレッポ滞在中に集めた情報から，旅人は「本当の話」を明らかにする。

2年前，ゴムッサの族長スリマン・イブン・メルシィドがセバー族で有力な地位につくと，デイル（Dcyr と表記，今は Deir ez Zōr）の知事は，彼を「正餐に招き，栄誉をもって歓待」した。スリマンはデイルから戻ると「砂漠で予期せぬ，決して自然でない死」にみまわれ，その家臣は知事に毒をもられたとして，トルコ当局とセバー族の間は「冷たい」関係となる。ホムス（Homs, Hums, Hůms と表記）とハマー（Hamah, Háma と表記，今は Hamā）付近の牧草地は，「砂漠の習慣」で，セバー族が，それらの都市の知事への貢納でもって，使用権を得ていたが，「繁殖に良い季節がつづきラクダに豊んだ」ロワラ族は，セバー族とトルコ政府の争いに目をつけ，その族長ソタム・イブン・シャアランが知事達にセバー族の払っていた額の2倍の額を提示し，多数の雌馬を贈物として渡し，その牧草地を占有した。

ベドウィンは，一年の大部分トルコ政府のコントロールの外に居るものの，春には，若いラクダや馬や羊毛の売買のため，政府の支配下にある都市のマーケットを必要とし，その商いの特権を知事から得なければならず，有力な知事の「好意に依存していた」と説明される。そして，そのトルコ当局は，「常に，ベドウィンの諸部族を互いに滅ぼしあう戦争状態にうまく置きつづけることを処生の原理としていた」と強調される。こうして，貪欲なベドウィンが，トルコ当局の手管であやつられ，牧草地をめぐる暴虐が姿をあらわす，という構図が示されることになる。

もともと占有していた牧草地がロワラ族に占められているのを知ったセバー族は，退くことを拒否し，ロワラとトルコ軍の襲撃を受ける。セバーの二支族ゴムッサとモアヤジャ（Moáyaja）のキャンプが掠奪された。彼らは，その軍事司令官のジェダーンに援助をもとめ，ロワラ族を逆襲，50人ほどを殺し，多くの雌馬を掠奪した。「欲しいものすべてを手に入れたトルコ政府に見捨てられ」たロワラ族は，ダマスカス近くの古くからの彼らの土地に退かされ，メソポタミアのシャンマール族の族長フェルハン・イブン・スフークに援助を求めるに至った。フェルハンは，イトコのスメイルをハーイルに送りロウラ族に対する援軍を求めたものの，イブン・ラシードは同意せず，スメイルの外交任務は失敗に終わった。ロワラ族はさらにセバー族に圧迫され，デイル西方のビシャリ山地（Bíshari と表記，今は Jebel el Bishri）の戦いでジェダーンに敗れ，死海東方のワディ・シルハン（Wady Sirhán, Wadi Sirhan と表記，今は，Wādi Sirhān）にある冬の牧草地へと退いたというのが，アレッポで旅人が把握した事件の「本当の話」であると言明される[175]。

パルミラ近くでジェダーンに会った旅人は，その人物像を明らかにする。ジェダーンは，「重きを置かれることのない」「非常に目立たぬ家系の貧しい男」であったが，その「手腕と勇敢さ」

「非常な勇気とすばらしい馬術の技」で軍事司令官の地位へと成り上った者，と描かれる[176]。子供時代には，メソポタミアのシャンマール族の族長スフークのもとに和平の人質として送られ，フェルハンの異母兄弟アブドル・ケリムがそのパトロンとなっていた。両者は長じて戦いあう両部族を指揮するようになり，ある戦いでジェダーン達が夜分包囲された時，その馬は疲労して動けなくなり，捕縛と掠奪にまかす他はなくなったが，アブドル・ケリムは昔の友情のあかしとしてシャンマールのそのキャンプで最上の馬をジェダーンに贈り，それによって，翌朝のシャンマール族の攻撃からジェダーンは脱出できた，という話が語られる。「この話は，我々を，サラディンの時代にもどした」と述べられ，アブドル・ケリムは「ベドウィン達に称賛されている騎士タイプの人物で気前が良く心の広（い人物で）……決してトルコ人と和平を結ぶことはない」と描かれる。彼は，ティグリス河畔の古い都市モスル（Mósul）の知事によって捕らえられ首くくられていた[177]。こうした描写に対して，ジェダーンは次のように対比的に描かれている。

> 外見では，彼は魅力ある（人物）ではない。…族長の尊厳の下に，貧しい者であった昔からの卑屈な態度のあとが今もある。彼の笑いは強いて（作ったもの）のようであり，彼の態度はためらいがちで唐突である…[178]。
>
> 彼は利己的な人物のようで，自分の計画や野心に全く心をうばわれているようである…[179]。

ジェダーンは，24才になる息子トルキを得てはいたが「愚鈍で」馬にも乗れぬ男で，立派な後継者を求めて，55才の今，15回目の結婚をしていた。また，失敗には終わったが，娘をロワラ族の族長ソタム・イブン・シャアランに嫁がせていた。旅人はこの結婚をジェダーンの「奇妙な振舞い」としている。ジェダーンの娘は，暮らしてゆけぬと実家に戻ったものの，ジェダーンはソタムを親族とみなし，「義理の息子として彼に要求ができる」と考えている，と説明されている。従って，ジェダーンにとってロワラ族との戦争は，「自らの個人的願望に反し」たものであり，満足のゆくものではなく，「悩み，心配」の種であった，と語られている[180]。

このロワラーセバー戦争で「最も損害を受けていた」モアヤジャの族長フェルハン・イブン・ヘデブも，旅人の手によって，ジェダーンとは対比的に描かれている。

> （彼は）22，3才の若年で…最も品の良いものごしをしていた。背は低いが，非常にほっそりとして優雅で，大変小さな手足をし，洗練された，ほとんどメランコリーな黒いオリーブ色の容貌をしていた。……彼の，我々に対する態度は，良くしつけられたタイプで――静かで，率直で，慎み深く，情愛深い懇切さに豊んでいた。……

> 戦いについて，彼は，飾ることなく，にがにがしく思っているとし，イブン・シャアランとトルコ軍による，彼に従う人々に対する，不誠実な攻撃について語った。……今や戦争は，彼らが失ったものをとりもどすまで継続されねばならない。……（モアヤジャの人々）は，粗野で無作法なジェダーンの人々とは違っていた。彼らは非常に行儀が良かった。…彼の血筋は，実際，セバー族の中で最良のものとみられている…[181]。

フェルハンとジェダーンは，容姿，血筋，心根，すべてに対照的に描かれているのは明らかである。このように描写された人々の中で，旅人は和平の仲介者として姿を現すことになる。

ジェダーンのキャンプを離れた時，アレッポ出身の知識人で彼の顧問官アブデル・ラーマンから，ジェダーンよりの和平交渉の委託が同行のアレッポのイギリス領事になされた。このことを旅人は次のように説明する。

> 今朝，私が，トルコのような有力な敵と対面している時，牧草地をめぐって取るに足らぬ争いをしてアナゼ族の力を分断する愚かさを指摘したことに，ジェダーンは心を動かされ，ダマスカスへの道の途中にあるロワラ族のキャンプへの外交上の使節の役を私が喜んでひきうけるであろう，ということが心に浮んだようである。全セバー族の族長達とその同盟者が呼ばれ，私がロワラ族へ持ってゆく和平条件が話しあわれる会議が開かれようとしていた。

紛争のもとになった牧草地についての協定が成れば，これまでの争いは忘れられる，とした和平を人々は求めていることが明らかにされた。

> もちろん，私は，本当に成功する価値のあるような，そうした交渉に役立ち得るかもしれぬと考えるのは喜ばしかった。アブデル・ラーマンは，私よりうまく説明すべく，次位の全権大使として，我々とともに行くことになり，我々全員は，この使節の任務を成功させるべく全力を尽くそうと志した[182]。

仲介の大使としてのイギリス領事と旅人（？）は名目上で，実務はもちろん顧問官の仕事となっているのは明らかであろう。二人のイギリス人の訪問を好機として，和平が企画されたことも明らかであろう。旅人を招いた者こそ，セバー族の族長の一人であったのだから，しかし，この旅人の気負い込んだ言葉から，彼が本当に要請された役割は不明とする他はない。もちろん，本人は，以降和平協定を成立させようとする主人公を自分の姿として提示することになる。

「最初の段取り」は，最大の被害者である族長フェルハンの意向を確かめることとされる。この，すでに上品で優雅な人物として描かれた人物は，彼に従う者達に和平を率直に話せぬとしながらも，自らは和平に賛意を旅人に示し，その彼を旅人は次のように描き出す。

> 彼は，…自らは，（戦争で）失ったものを忘れる意志のあること（を明らかにした）。彼は非常に率直でもわかりが良く，我々が話しあうすべての主題について，高潔な考えを示した[183]。

上品な振舞い，高潔な考えの人物の，決然とした態度に好意を示しつつ，旅人はロワラ族のキャンプにむかい，その族長ソタムに自説を示す。しかし，彼は，そのすべてに同意しつつも，戦いの続行を主張し，彼に従う者をコントロールできなくなっていた。

> 彼は弱く，決断力がなく，彼らの手の中の人形にしかすぎない[184]。

フェルハンの姿に対し，ソタムは対比的に描かれていることがわかる。

当時ソタムは，ダマスカスの総督（ワリ）から手紙を受けとっていて，それには今年の北進が禁じられ，言うべきことがあればダマスカスに来るように，とあったと言う。

> 新しい総督（ワリ）は「飢えて」いるので，自分の取り分を手に入れねばならぬと考えているのだとされた。そこで，ソタムは，明日贈り物を手にダマスカスへ出発するため，準備をしていた…。…我々は最後の協議を行なった。彼はいんぎんに耳を傾けたが，我々の望むどれも為すことができぬとして，非常に感傷的に弁解しようとした。

つまり，和平交渉は失敗した，と言うわけである。牧草地の特権を求めセバー族との戦いを求めトルコ人の好意を求めるロワラ族の人々を「導き，支配するには弱すぎた」族長の姿が特記される。

> 彼は，自分の利益を犠牲にして，その配下の者達の望みに従わねばならぬことを嘆いて，本当に感傷的になっていた。……私はソタムを尊敬することはないが，彼を好きだし，憐まざるを得ない。彼はただ弱いだけである[185]。

一貫してトルコの手におちる愚を主張し続ける旅人の姿は，それに賛意を示す二人の敵対する

族長の姿によってきわ立たせられている。不幸なる襲撃と逆襲の連続，終りなき有害な交換が，この真に弱きものの力でつづけられることをみつめる正論の旅人の姿を浮かびあがらせる構図をみてとることができる。旅人は，敵対する部族の貪欲さの的となって和平の仲介者とされることもあれば，その貪欲さによって正論をもつ仲介者たり得なくなることもある，と表出されていると整理されよう。部族関係，社会関係は，こうして強欲さと暴虐の中に存在し続けることが，言明されることになる。いく度となくくり返された，登場人物達の人物像，姿こそ，こうした世界の内容であることが，他の種々の暴虐の世界の登場人物の描写と組みあわせて理解されよう。

4. テンプタティオ

中世以来の中東イメージが，その地を誘惑者達，掠奪者達，殺人や迫害を行なう者達によって覆われ，福音の母なる地であることから遠ざかった土地としていたことはすでに明らかにされた。そこでは良きものは悪しきものと，真は偽と混交し，聖なるもの，正しきものは外見上の類似にとどまり，偽りの世界となっている，とイメージ化されていた。そこの住人は，野蛮人達であり，悪魔の受肉，サタンの従者達である，と言明されてきたことをすでにみてきた。従って，真と偽を正しく区別し，良きものと悪しきものとを正しく識別する者が，その地には必要である，ということになろう。何故なら，その地こそ，旅するキリスト者には，福音の生まれた地，聖にして正しきものの地であったのだから。

中東において，誘惑と攻撃にさらされ，聖人たることを示した者では，聖アントニウスが最も著名であろう。エジプトに生を受けたアントニウスは，隠修士として独居し,悪魔の誘惑(テンプタティオ)＝攻撃[186]に身をさらし，証聖者とされ，数多くの「誘惑図」に描かれ，19世紀にはフローベールによって描写されている。

ウォラギネによれば，アントニウスの前に現れた悪魔は，肉欲の誘惑者であり，殴殺者であり，猛獣の姿をとる者であり，金・銀の姿であり，神の力と知を持つと偽る巨人であった。それに対し，アントニウスは悪魔との「戦いぶりを見せる者」と言明されている[187]。アントニウスを攻撃する悪魔は，「つくりごとによって，善良な人々を惑」わし，「変装・変身」をし，［修道士になりすまし，信心深い人間のような口振りをしては，うわべだけでわれわれを落とし入れよう」とし，「真実と虚偽とをごちゃまぜにし」，「騒々しいデモンストレーションすなわち虚構（偽装）と喧騒に身をゆだね」ている者，と明らかにされている。またその出現は，「どことなくいかがわしいところがあって,それらは育ちの悪い人間や強盗の喧噪をおもわせる」と言明されている[188]。これらの表現と，イスラーム教徒についてのキリスト者の言表との類似は明らかであろう。中世以来，東方，中東は，攻撃者＝誘惑者の世界として表出され，悪魔がそこにイメージ化され，伝

統の悪魔像がそれに重ねられていたということであろう。それは偽りの外見を作るものと整理される。

19世紀の旅人達にとっても，中東は攻撃の世界である。疫病は東方の悪であり，都市の荒廃の外観を形づくり，人々は無頓着な表情をする。その陰うつな壮麗さは，西欧に敵対し，攻撃した過去の力と受けとめられる。旅人の目の前に現れ出ている外観・姿は今として意味づけられず，過去のものとして認識されている。疫病の今は，流行に対して無警戒で宿命として受けとめる人々の世界と認識されている。病いの東方は，神の恩寵から離れ，無知・迷信に覆われた現状を示すものとして，旅人によって表現されている。従って，病いの外観，疫病による荒涼たる風景が見ぬくべき表徴として旅人の前に置かれている，という旅行者の言説の構図が明らかとなる。

気象の中東も，信仰を離れた地を記念し，その罰としての神の怒りを思い起こさせる，死・荒廃の姿として表出される。死海の風景も，砂漠の風景も，砂岩の土地も，火山の山地も，すべて，その自然の力・原初の姿として，しかも，神の与えた罰である禁じられた世界であることが明らかにされている。みせかけの外見を作る蜃気楼も，危険なヴェールたる霧も，旅を阻む嵐も，それを見ぬく旅人によって形姿の戯れ，色彩の遊戯，そして，壮麗・崇高な絵画，ターナーレスクとして味わうことのできる風景美として表出されている。

そして，暴虐な人々の中東は，慎重で沈着で決然とした解読者たる旅人によって，明確に識別される。その基本は，人々の外見・態度の対比の呈示に置かれている。それは次のように。

信頼－友人	敵－悪魔(的)
勇　　敢	臆病，卑屈
正しい説明	偽りの説明
誠　　実	奸計，陰謀
分　　別	狂信，迷信
血統の良さ	成り上り
（貴族）	（暴君）
（騎士）	（虐殺者）
上品，優雅，洗練，高潔	みにくい姿，賤しむべき姿，みせかけの姿

多くの場合，強欲さや暴虐さが勝ち，荒廃の世界を生む，と言表されている。旅人の正論は通ることなく，自由と正義は行なわれず，荒廃が中東を覆うという構図が明らかとなる。

悪魔の誘惑は，多くの「誘惑図」として19世紀の東方絵画に現れ，近代の聖アントニウスに襲いかかるのだが，その形姿は，中東の旅では，攻撃の姿の背景につきまとう。ときに，旅の最中，

暴虐の悪－悪魔のような姿が現れ出る，とくり返し表出されていた。誘惑が孤立の男をきわ立たせるように，攻撃は旅人の孤高さと力を明らかにする。誘惑に敗けることなく——つまり東方の誘惑は，旅行記に描かれることなく——，旅人は，攻撃を回避し，退け，旅を完成させる自らの姿を明らかにする。こうして疫病・気象・暴虐のいかなる中東の覆いに対しても，それに近づき，まき込まれつつも，自らの立場を明らかにし，距離を作り，正しい判断をする観察者たる自分自身の姿を表出する旅人，という旅行記の構図が明らかとなる。

4 章（暴虐 —— 人間論）　注

1) Wilson, 1823, pp.243－244. Kinglake, 1844, pp.97－98. Burton, 1879, vol. I, p.334.
2) Saulcy, 1853, vol. II, pp.239－240.
3) Irby & Mangles, 1823, p.172.
4) Doughty, 1888, vol. I, pp.632－633.
5) Porter, 1855, vol. I, pp.175－177, 178－179, 181－182 & 185.
6) Saulcy, 1853, vol. I, pp.270－271 & 548－550.
7) 『サムエル記　上』22章，1。但しソルシィの同定は誤りと思われる。cf. May (ed.), 1974.
8) Porter, 1855, vol. I, p.179.
9) Stephens, 1837, p.341.
10) Saulcy, 1853, vol. I, pp.320－324.
11) Burckhardt, 1822, pp.513－516.
12) Burckhardt, 1822, pp.353, 356 & 362－363.
13) Burckhardt, 1822, pp.378 & 398－400.
14) Burckhardt, 1822, pp.407－408.
15) Irby & Mangles, 1823, pp.308－324.
16) Burton, 1879, vol. I, pp.319 & 327－330.
17) Stephens, 1837, pp.231, 238－241, 244－245 & 285－288.
18) 36章，6－7。
19) Palmer, 1871, pp.432－433, 436, 438 & 444.
20) Palmer, 1871, pp.439－440, 450－451 & 454－456.
21) Stephens, 1837, p.319.
22) Belzoni, 1822, vol. I, pp.10－11.
23) Belzoni, 1822, vol. I, pp.31－32.
24) Wilson, 1823, pp.185－186.
25) Wilson, 1823, p.307.
26) Doughty, 1888, vol. II, p.254.

27) Doughty, 1888, vol. I, p.198.

28) Porter, 1855, vol. II, p.217.

29) Porter, 1855, vol. II, pp.228－234. Warburton, 1845, vol. II, p.342.

30) Doughty, 1888, vol. I, pp.197－199 & 479.

31) Doughty, 1888, vol. II, pp.98, 99－100, 107, 112, 114－115, 146－147, 153－154, 176－178, 180, 183, 217－218, 220－223 & 227.

32) Burckhardt, 1822, pp.519 & 577.

33) Palmer, 1871, pp.315－316.

34) Burckhardt, 1822, pp.445 & 518. Burton, 1855－6, vol. I, p.239.

35) Wilson, 1823, p.241.

36) Warburton, 1845, vol. II, p.342.

37) Warburton, 1845, vol. I, pp.307－309.

38) Wilson, 1823, pp.375－376. Robinson, 1856, p.98.

39) Robinson, 1856, p.97.

40) Wilson, 1823, pp.376－377.

41) Wilson, 1823, p.378.

42) Robinson, 1856, p.98. Warburton, 1845, vol. II, p.100.

43) Richmond, 1977, pp.36－37. 岩永, 1984, 32頁。

44) Warburton, 1845, vol. II, p.29.

45) Stephens, 1837, p.25. cf. Legh, 1816, p.64.

46) Wilson, 1823, pp.50－51.

47) Stephens, 1837, pp.23－24. Legh, 1816, p.65. Warburton, 1845, vol. II, p.27－29.

48) Warburton, 1845, vol. II, pp.30－32.

49) Richmond, 1977, pp.40－41. 岩永, 1984, 48－49頁。

50) Warburton, 1845, vol. I, p.70.

51) Stephens, 1837, p.24.

52) Warburton, 1845, vol. II, p.33 ; vol. I, p.71. Irby & Mangles, 1823, p.160.

53) Warburton, 1845, vol. I, p.71.

54) Burckhardt, 1819, p.13. Irby & Mangles, 1823, p.160. Stephens, 1837, p.24.

55) Irby & Mangles, 1823, p.160.

56) Stephens, 1837, p.24.

57) Stephens, 1837, p.24.

58) Stephens, 1837, p.24. Burckhardt, 1819, p.13. Irby & Mangles, 1823, p.160.

59) Burckhardt, 1819, pp.13－14.

60) 本書は，歴史的事実を問題にするものではないので，その詳細については，次の書を参照。岩永, 1984, 62－71頁。Sabini, 1981.

61) Legh, 1816, pp.68－69.

62) Warburton, 1845, vol.Ⅱ, p.33.

63) Belzoni, 1822, vol.Ⅰ, p.13.

64) Warburton, 1845, vol.Ⅱ, p.33.

65) Belzoni, 1822, vol.Ⅰ, p.13.

66) Warburton, 1845, vol.Ⅱ, pp.33－34.

67) Warburton, 1845, vol.Ⅱ, p.33.

68) Burckhardt, 1829, pp.391－395.

69) ガレーブとその息子達はサロニカに幽囚，1816年疫病で死んだ。Sabini, 1981, p.95.

70) Burckhardt, 1829, pp.47, 52 & 237.

71) Warburton, 1845, vol.Ⅱ, p.37.

72) 1697－1842年にレバノンを統治したシェハーブ家については，ヒッティ，1972，128，151，163－4頁を参照。

73) Burckhardt, 1822, pp.194－195. Addison, 1838, vol.Ⅱ, p.30. Porter, 1855, vol.Ⅱ, pp.80－81.

74) Porter, 1855, vol.Ⅱ, pp.81.

75) シェハーブ家は，バシールⅠ世がここを都とした。ヒッティ，1972，163頁。

76) 歴史的事実の説明は，ヒッティ，1972，90－99頁参照。

77) Addison, 1838, vol.Ⅱ, pp.28－29. Warburton, 1845, vol.Ⅱ, pp.327－328. ギボン，1951－9，(7)，324－326頁参照。

78) Warburton, 1845, vol.Ⅱ, pp.328－329.

79) Burckhardt, 1822, pp.201－202. Addison, 1838, vol.Ⅱ, pp.27－28. Wilson, 1823, pp.484－485 & 487. Warburton, 1845, vol.Ⅱ, p.329.

80) Burckhardt, 1822, pp.195 & 197－199.

81) Addison, 1838, vol.Ⅱ, pp.19－28.

82) Warburton, 1845, vol.Ⅱ, pp.285－288 & 325－327.

83) Palgrave, 1865, p.230.

84) Palgrave, 1865, p.293.

85) Doughty, 1888, vol.Ⅰ, p.640.

86) Doughty, 1888, vol.Ⅰ, p.642.

87) Doughty, 1888, vol.Ⅰ, p.651.

88) Palgrave, 1865, pp.84－89. なお，彼が言及したアブサロムとアヒトフェルの話は，『サムエル記　下』16章，15－18章，18。

89) Palgrave, 1865, pp.92－94 & 125.

90) Doughty, 1888, vol.Ⅱ, p.28.

91) Doughty, 1888, vol.Ⅱ, p.30.

92) Doughty, 1888, vol.Ⅱ, pp.28－3i.

93) Doughty, 1888, vol.Ⅱ, pp.40－41.

94) Palgrave, 1865, p.239.

95) Palgrave, 1865, pp.239, 303－304, 320－321 & 323－333.

96) Stephens, 1837, pp.15 & 127.

97) Burton, 1855－6, vol.Ⅰ, p.118.

98) Stephens, 1837, p.128.

99) Warburton, 1845, vol.Ⅱ, pp.25－26.

100) Duff - Gordon, 1902, p.301.

101) Lindsay, 1838, vol.Ⅰ, p.44.

102) Duff - Gordon, 1902, pp.201－202.

103) Warburton, 1845, vol.Ⅰ, p.52.

104) Stephens, 1837, pp.10－11.

105) Warburton, 1845, vol.Ⅰ, p.53.

106) Stephens, 1837, p.11.

107) Lindsay, 1838, vol.Ⅰ, pp.45－46.

108) Lindsay, 1838, vol.Ⅱ, p.81. Stephens, 1837, p.328.

109) Robinson, 1841, vol.Ⅲ, pp.83－84. Addison, 1838, vol.Ⅱ, p.31.

110) Addison, 1838, vol.Ⅱ, p.19.

111) Warburton, 1845, vol.Ⅱ, p.327.

112) Lepsius, 1853, p.337.

113) Addison, 1838, vol.Ⅱ, p.253.

114) Stephens, 1837, p.385.

115) 『ヨシュア記』6章。

116) Burckhardt, 1822, pp.11 & 17.

117) Addison, 1838, vol.Ⅱ, pp.255－256.

118) Addison, 1838, vol.Ⅱ, p.252. Robinson, 1841, vol.Ⅱ, pp.161 & 461.

119) Addison, 1838, vol.Ⅱ, p.252.

120) Robinson, 1841, vol.Ⅲ, pp.275－276. この説明は，1838年にくり返えされた反乱に関してのものである。

121) Addison, 1838, vol.Ⅱ, p.252. Stephens, 1837, p.319. Robinson, 1841, vol.Ⅱ, p.161； vol.Ⅰ, p.366.

122) Addison, 1838, vol.Ⅱ, p.252.

123) Robinson, 1841, vol.Ⅱ, pp.162 & 461.

124) Stephens, 1837, p.328. Robinson, 1841, vol.Ⅱ, p.161.

125) Robinson, 1841, vol.Ⅱ, p.461； vol.Ⅰ, p.365－366.

126) Robinson, 1841, vol.Ⅲ, p.274.

127) ヒッティ，1972，184－192頁参照。

128) Churchill, 1862.

129) Porter, 1855, vol.Ⅱ, pp.187－188. なお，1852年当時のドルーズ派の行動について，「我々が，自らに利害のないものを守り，かつ，我々の家庭を，他者との戦いの間に，掠奪者の餌食となるにまかせる，というのは人間の本性に反する。この真理は，ハウランのドルーズ派の人々に，全き効力をもって当てはまる」と説明している。Porter, 1855, vol.Ⅱ, p.70.

130) Lepsius, 1853, pp.190－192.

131) Lepsius, 1853, p.193.

132) Lepsius, 1853, pp.199－200.

133) Lepsius, 1853, pp.200－201.

134) Lepsius, 1853, p.190.

135) Duff - Gordon, 1902, pp.207－208, 209－210 & 212－215. 彼女がここでふれた，「風に揺らぐ葦」を見るとは，荒野に預言者以上の者，道を整える者を見ることに対置されたイエスの言葉をふまえての表現である。『マタイによる福音書』11章，7－14参照。

136) Porter, 1855, vol.Ⅰ, pp.202－204.

137) Porter, 1855, vol.Ⅰ, pp.204－211 & 218－219.

138) Porter, 1855, vol.Ⅰ, p.252.

139) Porter, 1855, vol.Ⅰ, p.252.

140) Doughty, 1888, vol.Ⅰ, pp.378－380.

141) Burton, 1855－6, vol.Ⅱ, p.88.

142) Palmer, 1871, p.88.

143) Burckhardt, 1819, pp.138－139.

144) Doughty, 1888, vol.Ⅰ, p.491.

145) Burckhardt, 1819, pp.345－346. Burton, 1855－6, vol.Ⅱ, p.103.

146) Burton, 1855－6, vol.Ⅱ, p.103.

147) Palgrave, 1865, p.23.

148) Burton, 1855－6, vol.Ⅱ, p.87.

149) Doughty, 1888, vol.Ⅰ, p.449.

150) Burckhardt, 1822, pp.412－413.

151) 『申命記』，3章，8－10，29章，7。『土師記』，10章，7，11章，20－22。

152) Palmer, 1871, p.472. Doughty, 1888, vol.Ⅰ, pp.55－56.

153) Burckhardt, 1822, p.368.

154) Doughty, 1888, vol.Ⅰ, pp.55－56.

155) Burckhardt, 1822, p.348.

156) 『民数記』，32章，1。

157) Burckhardt, 1822, p.355.

158) Burckhardt, 1822, p.264.

159) Burton, 1879, vol. I, pp.334－335.

160) Doughty, 1888, vol. I, p.380.

161) Doughty, 1888, vol. I, p.234.

162) Doughty, 1888, vol. I, p.537.

163) Doughty, 1888, vol. I, p.380.

164) Doughty, 1888, vol. I, pp.567－568 & 611.

165) Doughty, 1888, vol. I, p.391.

166) Robinson, 1841, vol. II, pp.206－207. Burckhardt, 1822, p.471.

167) Burckhardt, 1829, p.307.

168) Burton, 1855－6, vol. I, pp.256－257.

169) Burton, 1855－6, vol. I, pp.247－248.

170) Burton, 1855－6, vol. I, pp.259－260.

171) Doughty, 1888, vol. I, pp.523－524.

172) Robinson, 1841, vol. II, pp.467 & 469.

173) Saulcy, 1853, vol. I, pp.293－294.

174) Blunt, 1879, vol. I, pp.61－62.

175) Blunt, 1879, vol. I, pp.68－71.

176) Blunt, 1879, vol. I, p.122 ; vol. II, p.83.

177) Blunt, 1879, vol. I, pp.121－124.

178) Blunt, 1879, vol. II, p.78.

179) Blunt, 1879, vol. II, p.88.

180) Blunt, 1879, vol. II, pp.84＆88－89.

181) Blunt, 1879, vol. II, pp.85－87.

182) Blunt, 1879, vol. II, p.94.

183) Blunt, 1879, vol. II, p.95.

184) Blunt, 1879, vol. II, pp.138－140.

185) Blunt, 1879, vol. II, pp.143－144.

186) temptatio … an attack ; an attempt, trial, proof. (Oxford, *An Elementary Latin Dictionary.*) 北島, 1984, 90, 388－9頁参照。

187) ウォラギネ, 1979, 第1巻, 244－253頁。

188) アタナシオスの『聖アントニウス伝』の第2部の, 北嶋の訳文によった。北嶋, 1984, 71－87頁参照。